

敷島町文化財調査報告 第13集
(山 梨 県)

山 宮 地 遺 跡 Ⅱ

敷島中学校駐輪場および部室建設事業に伴う
中世遺跡の発掘調査報告書

2003

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査報告 第13集
(山 梨 県)

山 宮 地 遺 跡 Ⅱ

敷島中学校駐輪場および部室建設事業に伴う
中世遺跡の発掘調査報告書

2003

敷島町教育委員会



2号竖穴状遺構出土の銅製品類 (2 堅 14 a)

序 文

敷島町は甲府盆地の北西部に位置し、町の北側は茅ヶ岳や太刀岡山などからなる山岳地帯や丘陵地形からなっており、それに対し南側には荒川によって形成された緩やかに南へ傾斜する扇状地が広がっています。近年ではこの南部を中心に開発が頻繁におこなわれ、それに伴い町の人口も増加の一途を辿っております。

町内では南部の扇状地上に最も遺跡が集中しており、古くから人々が生活をしてきた痕跡が数多く確認されています。これまで弥生時代の集落と墓域が確認された『金の尾遺跡』、県内で最も古い瓦窯でその操業が7世紀後半の白鳳時代まで遡るとされる『天狗沢瓦窯』などがあり、山梨県を代表する大変貴重な遺跡として県内外に広く認識されています。

さらに、最近の開発に伴う発掘調査では、松ノ尾遺跡で平安時代終わり頃の金銅製小仏像2躯が発見され、平安時代の集落跡である村続遺跡では銅製小仏像の台座や数多くの緑釉陶器、中国陶磁器などが出土し、年々相次いで貴重な成果が蓄積されております。

今回の山宮地遺跡は、敷島中学校内の西側に駐輪場と部室を建設するため事前の発掘調査をおこない、その内容をまとめたものです。調査では、およそ15世紀代（室町時代）の遺跡であることが明らかとなりました。中でも注目すべきことは、竪穴状遺構の中から、錫杖頭などの仏具を含んだ計17点の銅製品類がまとまって発見されたことです。このような出土状態は、全国的にみても今回が初例とみられ、一躍脚光を浴びることとなりました。

これからもなお一層、わが町の歴史を後世の人々に語り伝えるため調査・記録を精密に行い、さらに教育普及へと役立てていけるよう努力してまいります。

最後に、このたびの調査に際し、ご指導、ご協力いただきました関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

敷島町教育委員会

教育長 山 口 正 智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町島上条地区に所在する山宮地遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、町立敷島中学校の駐輪場および部室建設事業に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約86㎡である。
3. 発掘調査は、平成13年（2001年）7月5日～30日までの約1ヶ月間にわたって行った。また、整理作業は平成14年度事業として実施した。
4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者 敷島町教育委員会
調査担当者 小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
調査事務局 敷島町教育委員会生涯教育課
武井 泉（生涯教育課長 平成13年度）
長田徳一（生涯教育課長 平成14年度）
下笹俊彦（生涯教育課社会教育係主幹係長）
大寫正之（生涯教育課社会教育係副主査）
酒井紀子（生涯教育課社会教育係主事 平成13年度）
海野元巳（生涯教育課社会教育係主任 平成14年度）

5. 本書の執筆・編集および遺構・遺物の写真撮影は小坂が担当した。
なお、2号竪穴状遺構出土の銅製品の保存処理ならびに図化作業・写真撮影について帝京大学山梨文化財研究所に委託し、その実測図と写真を掲載した。
本書の執筆・編集にあたり大寫の協力を得た。
6. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。
（順不同、敬称略）
末木健、八巻與志夫、小林健二（山梨県教育委員会）、中込司朗、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑 大介（敷島町文化財審議会）、原田一敏、時枝 務（東京国立博物館）
藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、小野正敏（国立歴史民俗博物館）、関 秀夫（大正大学）、須田 勉（国土舘大学）、後藤和民（創価大学）、手塚直樹（青山学院大学）、合田芳正（中央大学）、山下孝司、関間俊明（韮崎市教育委員会）、平野 修（山梨文化財研究所）、新津 健（県立考古博物館）
佐野 隆（明野村教育委員会）、佐々木満（甲府市教育委員会）、降矢哲男（九州大学大学院生）
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）
青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、関本芳子、高添美智子、保坂広昭、保延 勇、望月典子、堤 吉彦、森沢篤美、柏木佳子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 本書の第1図は、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）「甲府市北部」「韮崎」「甲府市」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。
2. 遺物挿図中、断面白抜きは土器、 は須恵器、 は陶器類、 は磁器である。
3. 図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 遺跡をとりまく環境

- 1. 遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2. 周辺遺跡と歴史的背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第2章 遺構と遺物

- 1. 竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 2. 土坑・溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

第3章 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

- まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

挿図目次

第1図	山宮地遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・ 3	第11図	3・4号竪穴状遺構・・・・・・・・ 14
第2図	調査区位置図・・・・・・・・ 5	第12図	3号竪穴状遺構出土遺物・・・・・・・・ 15
第3図	遺構配置図・・・・・・・・ 5	第13図	4号竪穴状遺構出土遺物・・・・・・・・ 15
第4図	1号竪穴状遺構と出土遺物・・・・・・・・ 6	第14～16図	土坑(1)～(3)・・・・・・・・ 16～18
第5図	2号竪穴状遺構と銅製品類出土状態・・ 7	第17・18図	土坑出土遺物(1)・(2)・・・・・・・・ 19・20
第6～10図	2号竪穴状遺構出土遺物(1)～(5)・・ 8～12	第19・20図	遺構外出土遺物(1)・(2)・・・・・・・・ 21・22

表目次

第1表	2号竪穴状遺構出土銅製品一覧・・・・・・・・ 13	第5表	土坑一覧・・・・・・・・ 20
第2表	竪穴状遺構出土の鉄製品一覧・・・・・・・・ 15	第6表	溝状遺構一覧・・・・・・・・ 20
第3表	竪穴状遺構出土遺物一覧・・・・・・・・ 16	第7表	土坑出土遺物一覧・・・・・・・・ 20
第4表	土坑内出土の鉄製品一覧・・・・・・・・ 16	第8表	遺構外出土遺物一覧・・・・・・・・ 22

図版目次

図版1-1	遺跡全景	図版2-3～6	2号竪穴状遺構 銅製品出土状態
図版1-2	1号竪穴状遺構	図版2-7	2号竪穴状遺構 出土遺物
図版1-3	3号竪穴状遺構	図版3・4	2号竪穴状遺構出土の銅製品類
図版1-4	4号竪穴状遺構	図版4-8	竪穴状遺構出土遺物(1・3・4号)
図版1-5	1～4号竪穴状遺構全景	図版5	土坑
図版2-1	2号竪穴状遺構	図版5-8	土坑内出土遺物
図版2-2	2号竪穴状遺構調査時 (銅製品出土地点)		

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この一帯の西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、しかも南側の盆地に向かって開口し、まるで天然の要害を形成するかのような特殊な地形を織り成している。

このうち、荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17km、東西約4kmと南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ8～9割は標高1,704mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形にあり、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように甲府盆地の北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成されており、荒川右岸に位置する本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 周辺遺跡と歴史的背景（第1図）

近年もっとも頻繁に発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期には稀である埋甕炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれ、1987年の中央高速自動車道建設による第Ⅰ次調査で住居跡計8軒（前期末1軒、中期7軒）、さらに第Ⅳ次調査で住居跡1軒と竪穴状遺構1基が確認された。

また、松ノ尾遺跡（第Ⅲ次調査区内）でも中期中葉にあたる住居跡1軒が確認されているが、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できているのは現在のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡⑧があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第Ⅰ次調査で弥生時代の住居跡32軒、方形・円形周溝墓17基をはじめ、南北の集落跡を二分し環濠の可能性もあるV字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物は、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

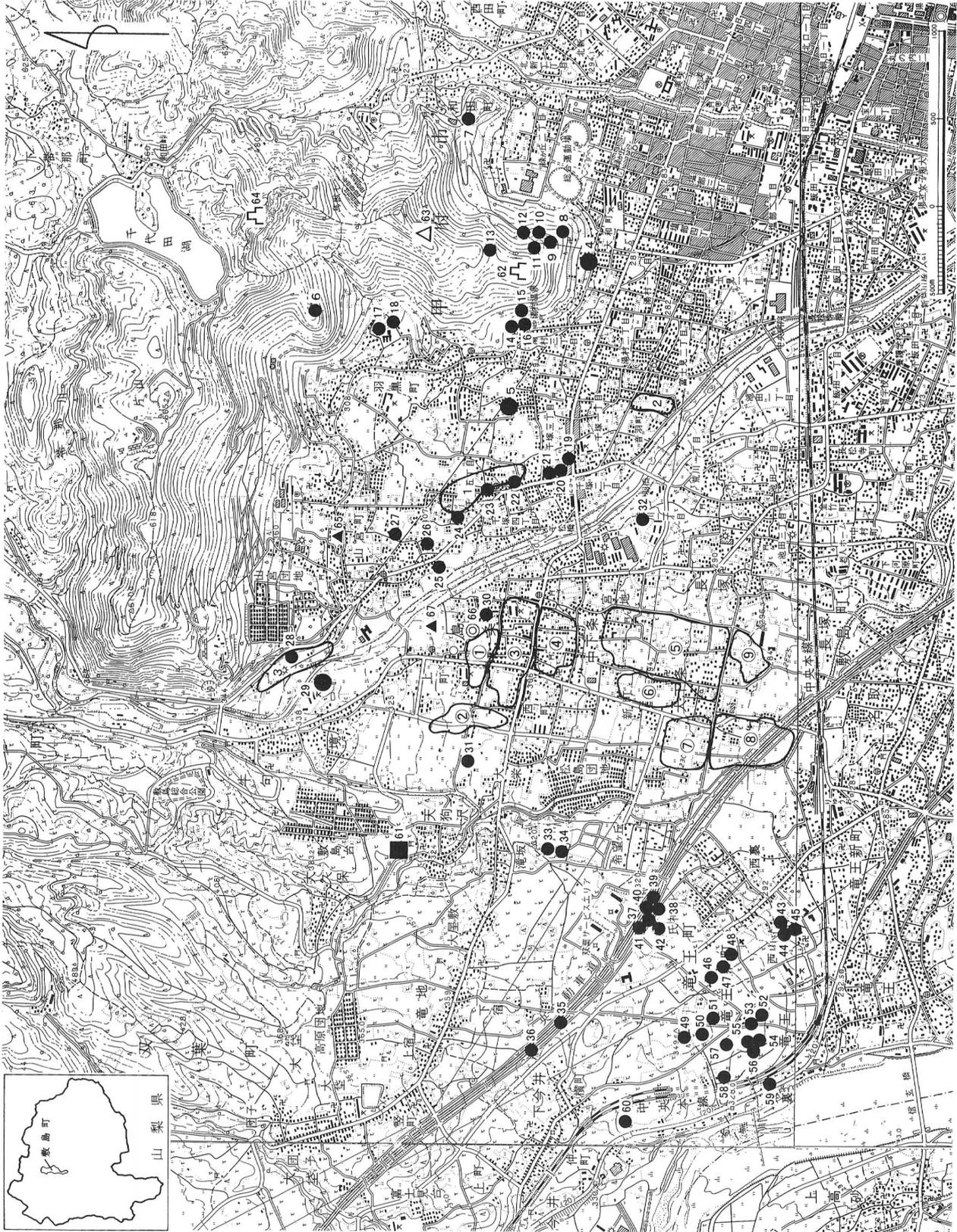
また、第Ⅵ次調査では遺跡の外側を巡るとみられる長さ約55mの大溝（環濠跡）も発見されている。

古墳時代 これまで7遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（Ⅰ次）では落込み内から水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点、末法遺跡（Ⅱ次）では1号住居跡から緑色凝灰岩質の加工途中の管玉1点と剥片類が出土し、該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡（Ⅳ・Ⅵ次）でも該期の多くの遺物が出土しており、とくにⅣ次調査では本町では初めての発見となる前期の周溝墓が2基確認され、本遺跡内でさらに新たな集落跡が発見される可能性は実に高い。



第1図 山宮地遺跡と周辺の遺跡

- ① 山宮地
- ② 原藤
- ③ 竹尾
- ④ 不動ノ木
- ⑤ 松ノ尾
- ⑥ 三軒堂
- ⑦ 御田田
- ⑧ 金の尾
- ⑨ 末法
- 1 榎田
- 2 香羽
- 3 米重
- 4 万壽結古墳
- 5 加尾部塚古墳
- 6 おろくさん古墳
- 7 三光寺山古墳
- 8 藤村山1号古墳
- 9 藤村山2号古墳
- 10 藤村山3号古墳
- 11 藤村山4号古墳
- 12 藤村山5号古墳
- 13 藤村山6号古墳
- 14 大平1号古墳
- 15 大平2号古墳
- 16 塚次寺裏無名古墳
- 17 大塚古墳
- 18 無名塚古墳
- 19 養師塚古墳
- 20 社文塚古墳
- 21 泉塚古墳
- 22 猪塚古墳
- 23 無名2号墳
- 24 子母塚古墳
- 25 無名1号墳
- 26 天神塚古墳
- 27 天塚古墳
- 28 米塚古墳
- 29 大塚古墳
- 30 大塚古墳
- 31 須賀主塚 (無名町)
- 32 穴塚古墳
- 33 後生塚古墳
- 34 後生塚古墳
- 35 双塚2号墳
- 36 双塚古墳 (涼葉町)
- 37 華土1号墳
- 38 華土2号墳
- 39 華土3号墳
- 40 ニツ塚1号墳
- 41 ニツ塚2号墳
- 42 へび塚
- 43 西山1号墳
- 44 西山2号墳
- 45 西山3号墳
- 46 狐塚1号墳
- 47 狐塚2号墳
- 48 狐塚3号墳
- 49 中林塚
- 50 丸山古墳
- 51 四ツ石塚
- 52 形部塚1号墳
- 53 形部塚2号墳
- 54 阿目塚1号墳
- 55 阿目塚2号墳
- 56 阿目塚3号墳
- 57 阿目塚4号墳
- 58 阿目塚5号墳
- 59 片瀬塚
- 60 双塚3号墳
- 61 天狗沢五塚
- 62 藤村山城
- 63 法興寺山塚六台
- 64 和田城山
- 65 山之傳遺跡 (五輪塚1基)
- 66 土屋遺跡 (遺跡防推定地)
- 67 基壇跡五輪塚

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡1軒がみられる。

末法遺跡（I次）は1号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種とその量が充実している。

金の尾遺跡（IV次）1号住居跡や御岳田遺跡（I次）2号住居跡でも甕、甑、坏、高坏が出土している。

後期の甲府盆地北西部では、6世紀中頃から横穴式石室を有する後期古墳が築造されるようになる。

代表的なものに荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳(4)や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)が存在し、この頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・山宮古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第1図の●印）。

町内においても戦後間もない頃、4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳(29)と大庭古墳(30)が存在するのみである。ちなみに、松ノ尾遺跡の第I・II次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれてきた土砂と考えられる黒色包含層中から須恵器の甕、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるものがあることから、中には災害により流されてしまった古墳もあったと考えられる。

当時の人々が暮らしていたとみられる集落跡は、現在松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、周辺遺跡の発掘状況から比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。とくに、第I、II、V次調査では、住居跡が複雑に重複して確認されており、しかも第II次調査では一辺約7m、第V次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第VII次調査でも一辺約7.7mを測る大型の住居跡が発見されている。

そして、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西部に天狗沢瓦窯(61)が設けられ、操業を開始するようになる。出土した瓦や須恵器等から7世紀後半（白鳳期）に位置付けられ、県内最古の瓦窯である。

この時期に併行する集落跡は、松ノ尾遺跡で徐々に確認されてきているが未だ検出状況としては少ない状態で、また先の天狗沢瓦窯跡で焼かれた瓦が供給されたであろう寺院跡も残念ながらまだ発見されていない。

しかし、近年松ノ尾と村統遺跡③で布目瓦などの出土がみられ、今後両遺跡での更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも100軒以上に上る。

これまでの調査成果をみると、奈良～平安時代初め頃にかけての遺構は未だ少なく、むしろ平安時代中頃～末頃にかけて急激に増加し、10・11世紀ごろの集落跡が主体を占めている。

松ノ尾遺跡⑤はこれまでの7回の調査で住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、次いで周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などでも検出され、その分布の広がりが見られる。

一方、町南部の北側では、山宮地遺跡①、原腰遺跡②などがあり、村統遺跡③では調査面積が約320㎡と狭小であったが計37軒の住居跡が発見され、大規模な集落跡の様相を呈することが分かってきている。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器と墨書土器をはじめ須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などがある。特殊なものには、松ノ尾遺跡で円面硯（4個体分の破片）、銅製の帯金具などのほか、10～12世紀の早い段階から中国産「貿易陶磁」がもたらされていることが最近明らかとなっており、器種として碗、皿、水注などの類が出土している。

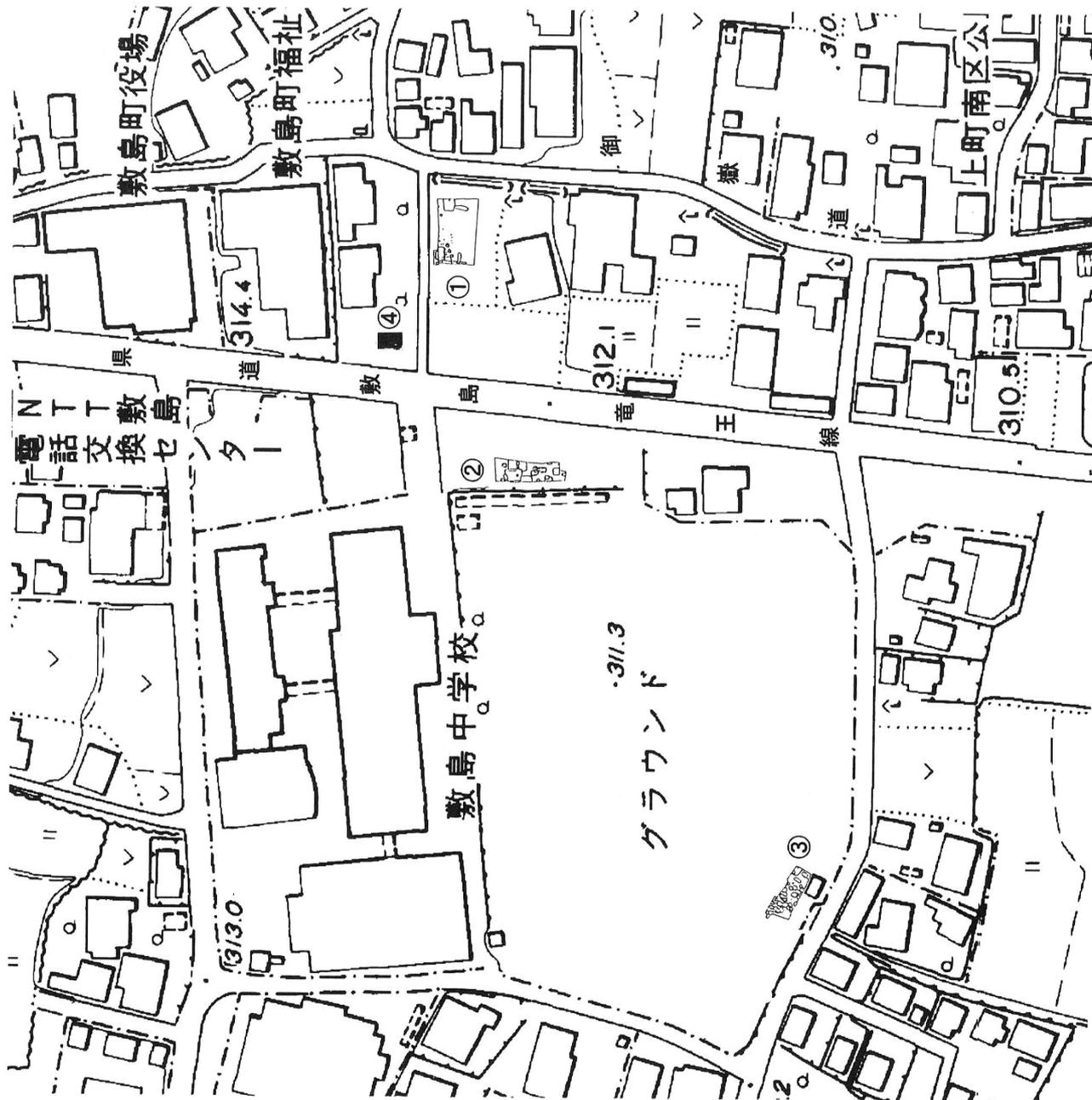
平安時代末頃には、原腰遺跡、村統遺跡、松ノ尾遺跡、御岳田遺跡などで集落が営まれている。中でも、松ノ尾遺跡は金銅製小仏像2軀、村統遺跡では銅製小仏像の台座が1軀出土しており、これらはその出土状態や共伴遺物、文様・鑄造技術などからおおよそ11～12世紀代の所産とみられている。

中世 該期の遺構は、山宮地遺跡①と松ノ尾遺跡⑤の2遺跡で、現在発見されている。

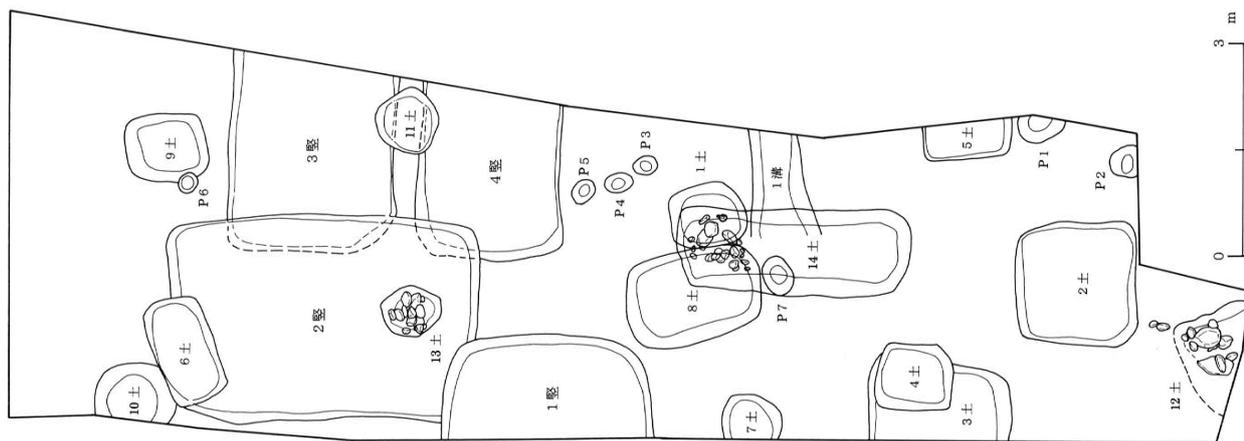
松ノ尾遺跡は、第VII次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土していることから、おそらく平安時代末～中世初頭（12～13世紀頃）の遺構とみられる。

また、山宮地遺跡では15～16世紀に相当する竪穴状遺構や数多くの土坑が近年発見されてきている。

今回は、山宮地遺跡の第II次調査の報告であり、以下その成果についてみていくこととする。



第2図 調査区位置図 (①第1次、②第2次、③第3次、④H13年試掘)



第3図 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

今回報告する第Ⅱ次調査は、平成13年度におこなった調査内容をまとめたもので、発見された遺構には竪穴状遺構4基、土坑14基、溝状遺構1条、ピット7箇所がある(第3図)。これらの遺構は中世に属し、それぞれの遺構より出土した遺物から、おおよそ15世紀代に相当するものと考えられる。

1. 竪穴状遺構(第4~13図、第1~3表、図版1・2)

a. 1号竪穴状遺構(第4図、第3表、図版1-2、4-8)

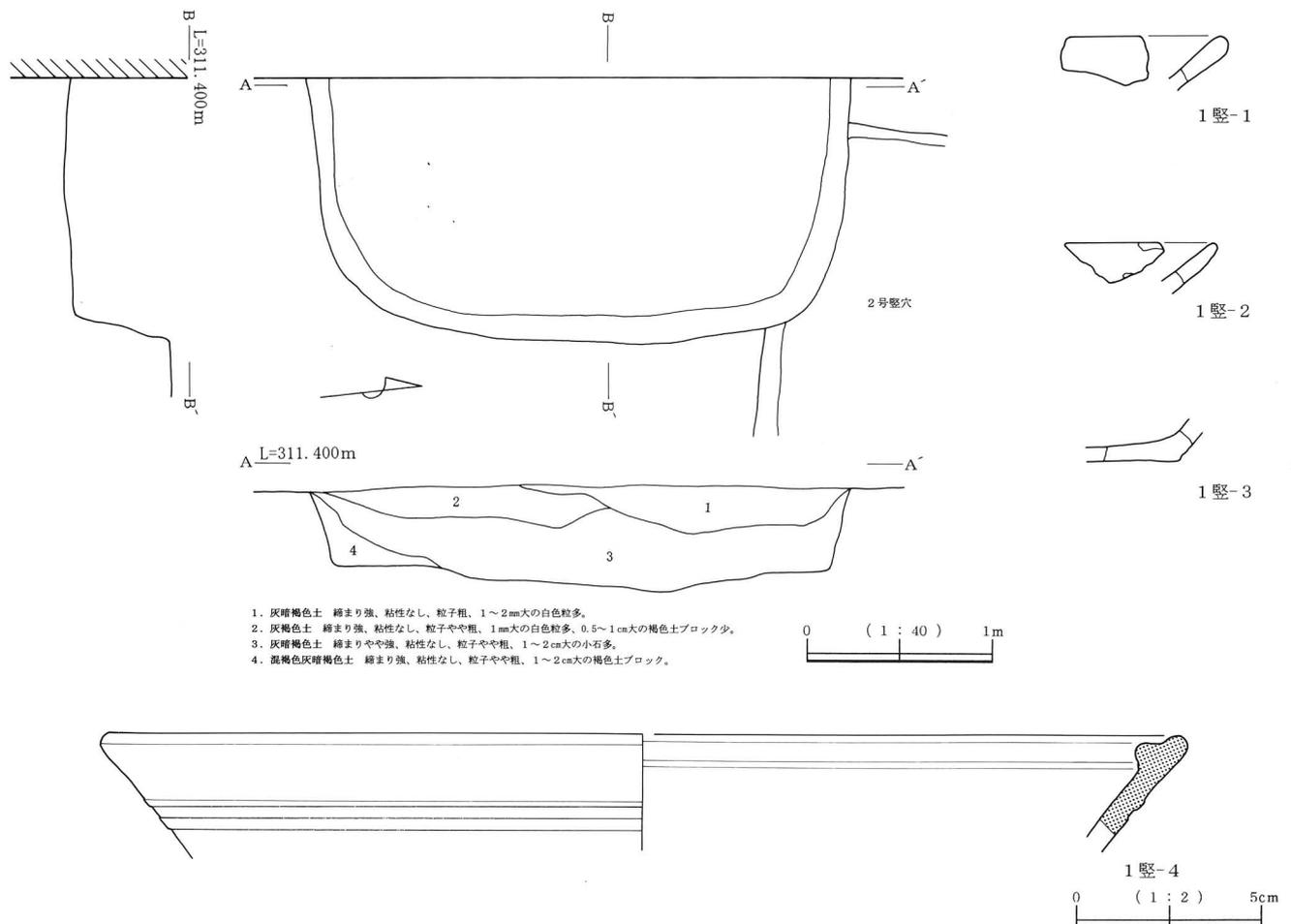
調査区の西側中央からやや北寄りに位置している。遺構の東側半分は調査区外となっており明らかでない。本遺構は北東部において2号竪穴状遺構と重複し、しかもその遺構を切っている。

規模は、南北約3.0m、東西の確認可能な部分では約1.44mを測り、おそらく全体の形状として隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するとみられる。深さは壁際において約40~50cmを測り、壁は外側に向かって概ね直線的に立ち上がり、かなりしっかりと掘り込みとなっている。

床面の状態は、遺構中央部にかけて徐々に深くなる傾向がみられ、最深部で約60cmを測る箇所もある。

覆土は、灰暗褐色土を基調とし、遺構の下部へと掘り下げるにしたがって1~2cm大の小砂利が多く含まれ、壁際の4層では1~2cm大の褐色土ブロックを多分に含んでいる。

遺物は、ほとんどのものが細片で中には判別しづらいものもあるが、縄文土器、平安時代の土師器、中世の土師質土器や陶器などの破片が出土している。



第4図 1号竪穴状遺構と出土遺物

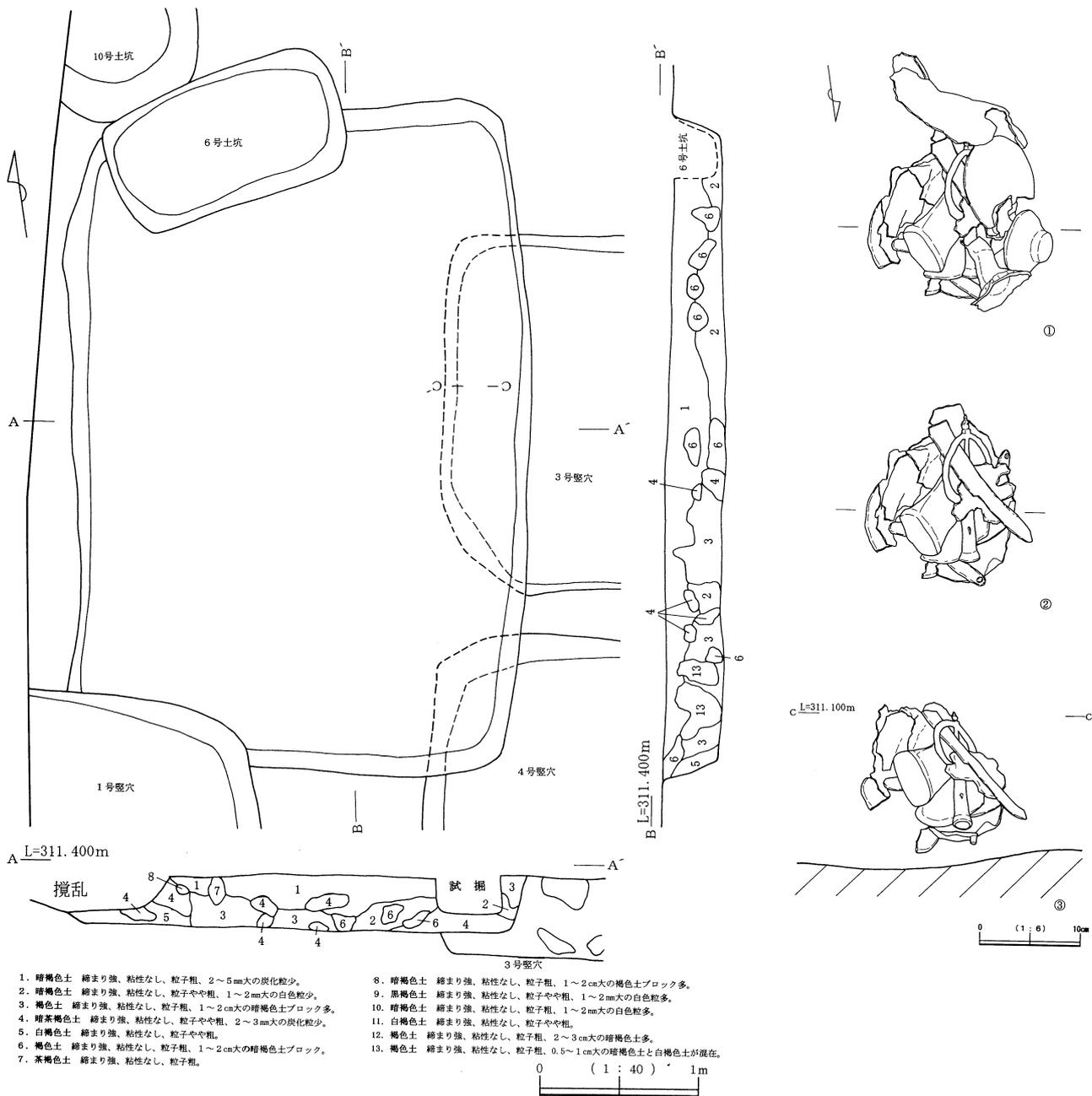
1～3はかわらけの細片で、4は鉄釉の播鉢口縁部片（古瀬戸後IV期）であり、4は遺構の床面上から出土している。

b. 2号竖穴状遺構（第5～10図、第1～3表、図版2～4）

調査区の北部やや西寄りに位置する。北西部に6号土坑、南側中央付近に13号土坑、南西部に1号竖穴状遺構、東部と南東部には3・4号竖穴状遺構があり、これらの遺構と重複関係にあった。中でも6号土坑と1号竖穴状遺構に切られ、3・4号竖穴状遺構と13号土坑を切って構築されている。

規模は南北約4.2m、東西約2.8mを測り、長方形を呈する。深さは約45～50cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。なお、西側壁中央周辺には大きな現代の攪乱がみられたが、本遺構の掘り込みに比べて浅かったことから東壁全体を確認することが可能であった。

床面はほぼ水平で、遺構内の北西部分は地山に混在する礫群が床面から壁面にかけて露出していた。



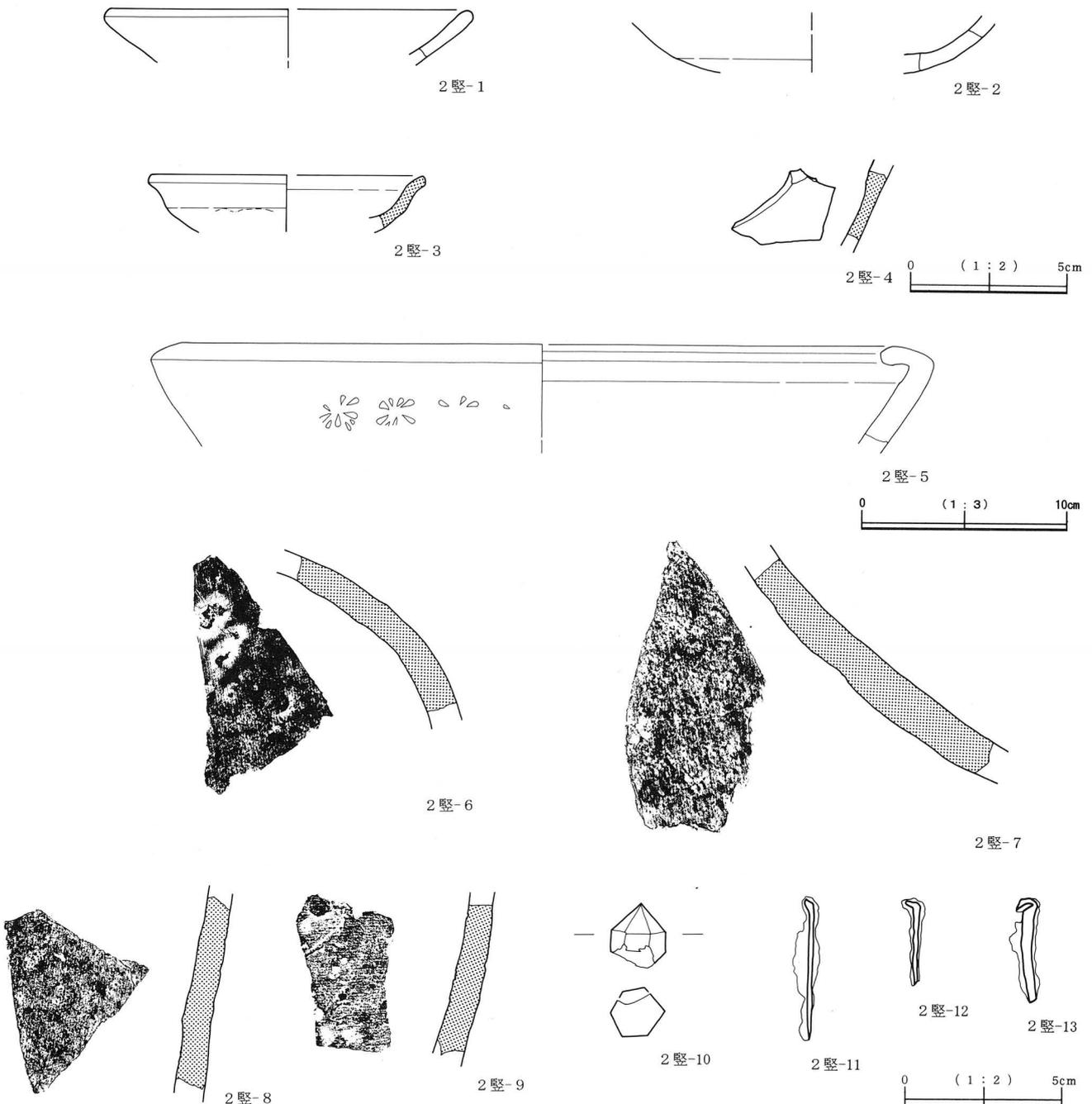
第5図 2号竖穴状遺構と銅製品類出土状態

覆土は、暗褐色土を基調としながら1～2cm大の褐色土ブロック、大型の褐色土ブロック(3・6・13層)や茶褐色土ブロック(4・7層)などが多く混在している。そして、1・4層には2～5mm大の炭化粒が少量含まれる。本遺構の確認段階でちょうど1層上面では直径10～20cm前後の希薄な焼土のまとまりが北東部を中心として数ヶ所で観察されたが、これらは層を形成するほどのものではなかった。

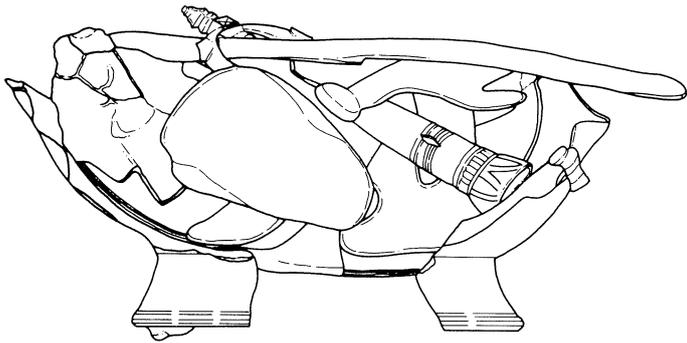
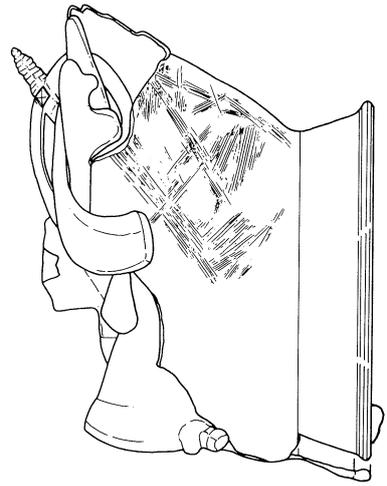
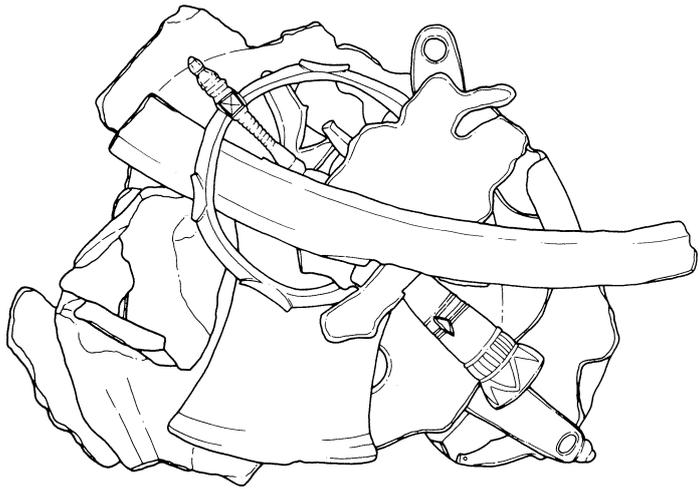
本遺構からは、縄文土器、平安時代の土師器、中世の土師質土器、陶器、瓦質土器などが出土している。

1・2は中世のかわらけ片で、3は陶器の皿(古瀬戸後IV期)、4は祖母懐の茶壺片(古瀬戸後期)とみられる。5は瓦質土器の火鉢、6～9は常滑甕の破片である。なお、遺構内の覆土中からは11～13にみる鉄釘が3点出土した。

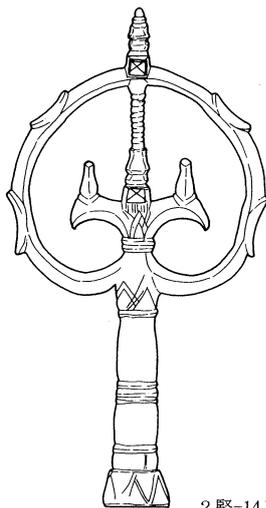
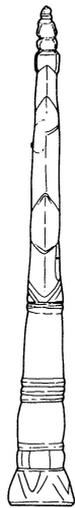
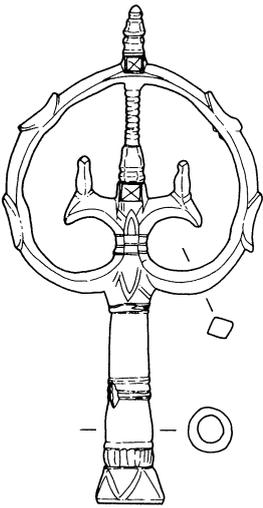
また、特筆すべきことは東壁中央のやや北寄りからほぼ床面のレベルで、複数の仏具を含んだ銅製品類(14a)がまとまって出土したことである。銅製品類の固まりは東壁から遺構の内側中央へと向かって傾いた状態で発見された(第5図右図、図版2-5)。



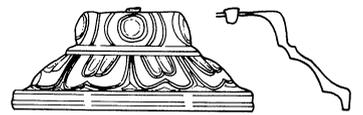
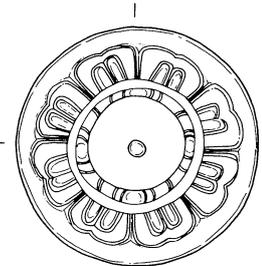
第6図 2号竖穴状遺構出土遺物(1)



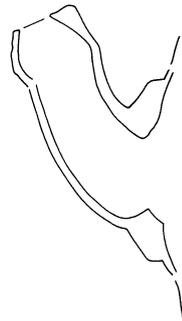
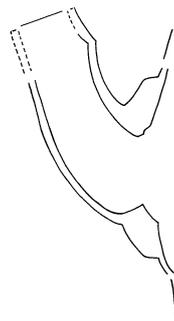
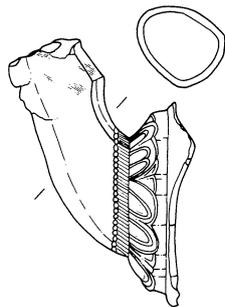
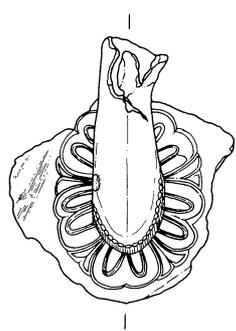
2 竖-14 a



2 竖-14 b

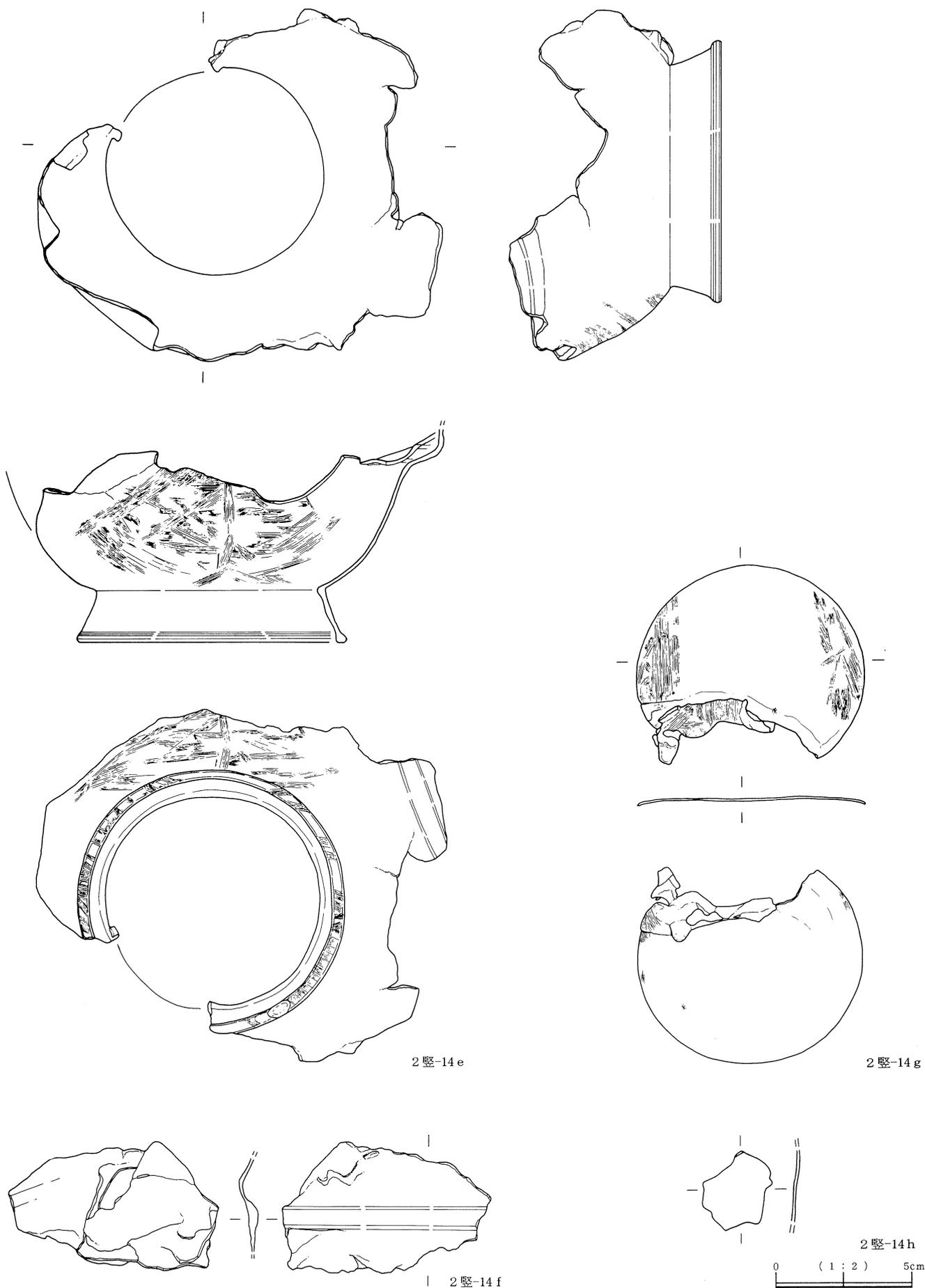


2 竖-14 c

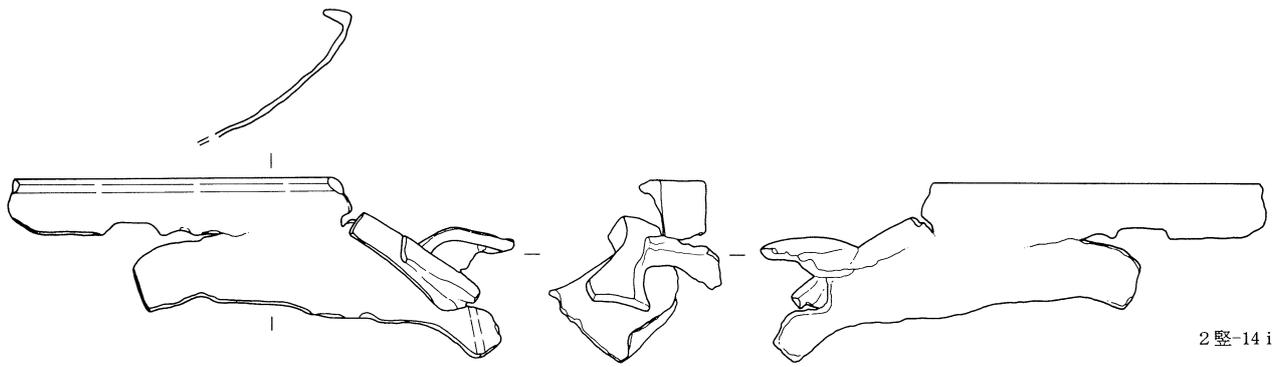


2 竖-14 d
0 (1:2) 5cm

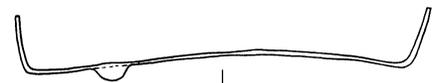
第 7 图 2 号竖穴状遗构出土遗物 (2)



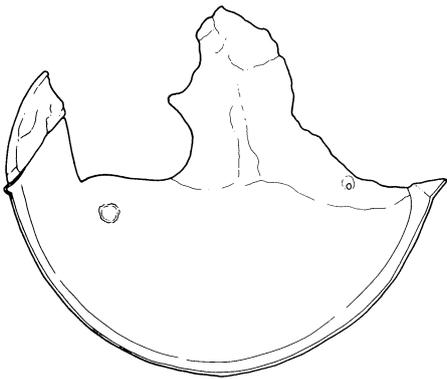
第8图 2号竖穴状遗构出土遗物(3)



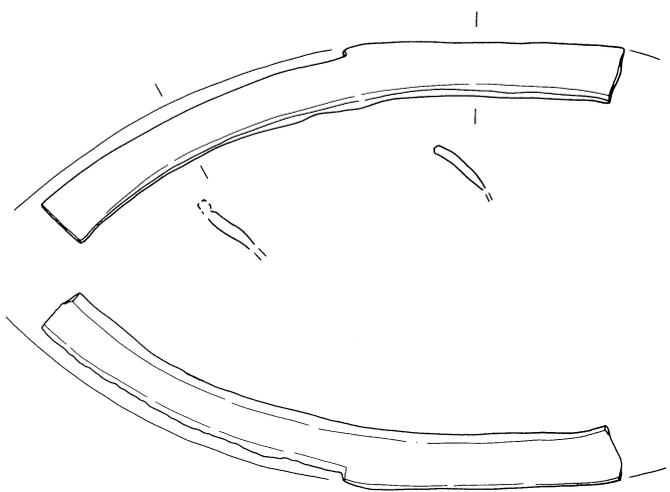
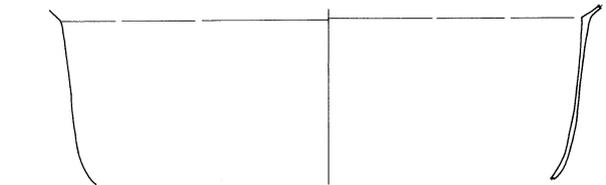
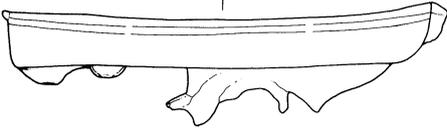
2 豎-14 i



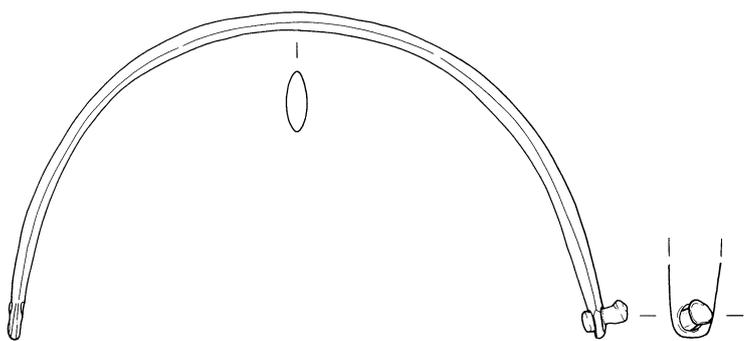
2 豎-14 k



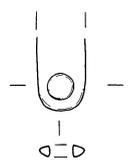
2 豎-14 j



2 豎-14 l

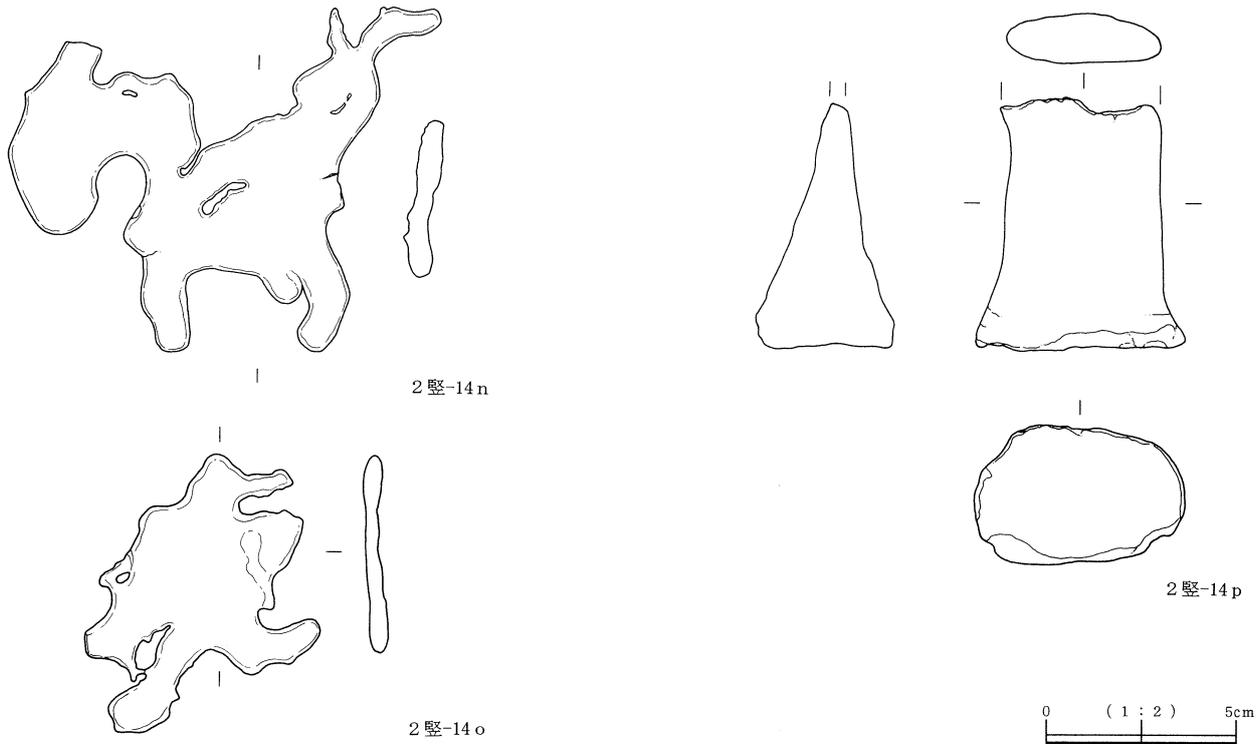


2 豎-14 m
(1 : 2)
0 5cm



○=D

第 9 图 2 号豎穴状遺構出土遺物 (4)



第 10 図 2 号豎穴状遺構出土遺物 (5)

一括出土の銅製品類 (2 豎-14 a~p、第 7~10 図、第 1 表、図版 3・4)

出土した銅製品類は計 17 点を数え、中には仏具を伴い第 5 図右①にみるような状態で集積されていた。

各銅製品類は、部分ないしはその大半が破損や溶融を受けており実用可能でしかも元々の形状をそのまま保ったものはほとんどなく、中には全く本来の姿が不明で溶融し銅の塊のようになったものまである。

判別が可能なものには、b. 錫杖頭、c. 舍利塔の蓮華座下部、d. 水瓶の注口部、e. 水瓶の胴下半部、g. 水瓶の底板、f. 水瓶の胴部片、h. 水瓶の胴部細片などがある。錫杖頭 b は「手錫杖」で、本来読経などの調子をとるため輪が付属し音を出す、欠損または腐食したためか残っておらず、また柄の中央部には破損した穴がある。c は舍利塔の蓮華座下部とみられる。それは上面中央に残された「鉤」の存在から、上部に蓮弁からなる蓮華部がこの鉤により固定されていたと推測され、その上には水晶を抱いた宝珠形の火焰が乗っていたと考えられるが、ほかに飲食器の可能性も残す。d~h は水瓶が破損したもので、注口部 d の蓮弁からなる装飾や胴下半部 e と胴部片 f などにある横位の子持ち帯紐が巡っていた痕跡から、これらは「布薩形」水瓶の破片とみられる。i~l は詳細が明らかでないが、j は浅くほぼ直立した皿状の容器で底部に 1 箇所だけ直径約 1 cm 大の鉤が残存する。また、k は破片 2 点が接合し、口縁が外反する容器の一部であり、接合はしないが l は外反する k の口縁部であった可能性もある。これら k・l が同一個体であれば浄水を六器に注ぐ「提子(ひさげ)」の形態と類似している。m も破片 2 点が接合し、井戸から浄水を汲む「閼伽桶」の把手の可能性が考えられる。しかし、把手と容器を繋いだであろう鉤は容器を外側に受ける格好で外れていることから、先の k・l に関連する「提子」に付属する把手の可能性も一応考慮しておきたい。n・o は熱を受け溶解した板状の塊で p を含め鋳物関連の遺物であった可能性もある。

以上にみた銅製品類は、最初第 5 図右①の状態で出土し、この集積された銅製品類の上部西半部にあった水瓶注口 d、蓮華座 c、水瓶底板 g、不明銅製品 i を順番に北から一点ずつ取り除いたところ、錫杖頭 b を含むその他の銅製品類が水瓶下半部 e の中へ無造作に入れ込みとなって納まっていた(第 7 図 14a、図版 2-6)。

また、第 5 図右①にみる銅製品類の固まりの外面には所々に繊維質の有機物が付着していることが確認できた。この繊維質のものは一定方向に規則的に集合し幅 3~4 mm 程度の単位で紐状の束となり、第 8 図 14e、14g にあるように、さらにそれぞれの束が重なり合っていた。中でも、とくに状態が比較的良好であった水瓶胴下半部 e などの側面には編物状に付着していることが観察された(図版 4-7)。

2 豎 No.14	種別	器形	状態の寸法 (cm)	重さ (g)	特 徴	図版
14 b	仏 具	錫杖頭	13.40×6.89×1.79	94.57	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。輪は宝珠形で、上下左右に三日月形を付し、下方は内側に巻き込み蕨手状となる。頂部に五輪塔、輪内部中央の股上にも五輪塔を設け、上方には線彫りで相輪様を造り出す。柄の中央部に子持ち帯紐、柄の上下には各一条の紐を鑄出する。また、輪中央の蕨手状となる巻き込みは線刻による二条の紐で束ねられる。輪頂と輪中央に設けた五輪塔の地輪部には「×」の線刻が施され、柄の上下部には鋸歯文が線刻されている。	3-1
14 c	仏 具	舍利塔 or おんじきき 飯食器	6.35×2.62	81.25	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。舍利塔もしくは飯食器等の蓮華座下部とみられる。上段に敷茄子を造り玉抱き状に線刻で鬼目を施し、下段は八葉の蓮弁で反花となる。上段と下段の間にはわずかに独立した段が設けられ、受座を造り出している。敷茄子の上面中央には長さ4mm、幅4mmの紙が穿たれ残存しており、この上に蓮華部もしくは坏状の器が固定されていたことが窺われる。	3-2
14 d	仏 具	水 瓶 注口部	7.63×6.24×4.54	113.94	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。布薩形水瓶の注口破片である。本来、水瓶の胴部肩に近い位置に付され、長い注口とみられるが先端は欠損している。注口基部には手前に細かな線刻で幅4mmの蓮肉が全周しており、さらに胴部面にかけて2重の蓮弁が施されている。	3-3
14 e	仏 具	水瓶 胴下半部	15.97×13.78×7.8	238.9	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。布薩形水瓶の胴下半部である。この水瓶には胴中央に子持ち三条の帯紐が全周していた形跡が窺える。上半部が大きく欠損し、胴下半部と底部の約6分の1が著しく熔融して失われている。高台端部は肉厚となる。	3-4 4-7
14 f	仏 具	水瓶 胴部片	8.13×4.84×2.84	53.83	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。布薩形水瓶の胴部片とみられる。破片中央に14eと同様な子持ち三条の帯紐が明確に認められる。意図的にかなり捻じ曲げられ、一部熔融している。	3-5
14 g	仏 具	水瓶底板	8.54×8.45×2.19	41.23	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。水瓶の底部と思われる。とくに径の大きさから14eの底部であったとみられる。一部熱を受けて熔融している。	4-1
14 h	仏 具	水 瓶 胴部片?	3.05×2.63×2.1	3.11	全面緑青色に錆びている。厚さなどから水瓶の一部と思われる。	
14 i	不 明	不 明	13.72×4.97×2.07	53.57	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。上方は強く内屈しており、その端部は完結した縁辺を造り出している。破損が著しく器種は不明である。	
14 j	不 明	不 明	10.5×11.3×3.0	74.85	直立した浅い皿状を呈する。1ヶ所だけ直系9mm大の明らかな紙がみられる。約半分が著しく破損している。	4-2
14 k	不 明	不 明	8.54×4.90×7.0 7.98×4.79×0.49	39.02 31.59	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。2つの破片が接合した。何の容器であるかは不明で、内傾しながら緩やかに立ち上がり、上方で強く外反する。このような特徴から「提子」の胴部片の可能性もある。	4-3
14 l	不 明	不 明	15.84×1.96×0.35	41.77	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。弓状に沿った外側には一部完結した縁辺が残る。半円状であったものが若干扁平に引き伸ばされている。14kの口縁部であった可能性もある。	
14 m	不 明	把 手	9.21×1.61×0.42 14.00×1.65×1.20	35.25 73.76	鑄銅製で全面緑青色に錆びている。2点が接合している。扁平な鍋づる状で「鬺伽桶」または「提子」の把手の可能性もある。片側に「紙」が残存する。	4-4
14 n	不 明	溶融物	12.08×9.22×0.76	156.33	熱を受けた銅が、薄く板状に冷えて固まったものとみられる。	4-5
14 o	不 明	溶融物	8.21×5.65×0.50	71.36	熱を受けた銅が、薄く板状に冷えて固まったものとみられる。	
14 p	不 明	銅塊	6.50×5.45×3.62	351.63	断面三角形状で厚い部分は楕円形を呈する。	4-6

第1表 2号豎穴状遺構出土の銅製品一覧

c. 3・4号竪穴状遺構 (第11~13図、第2・3表、図版1-3~5, 4-8)

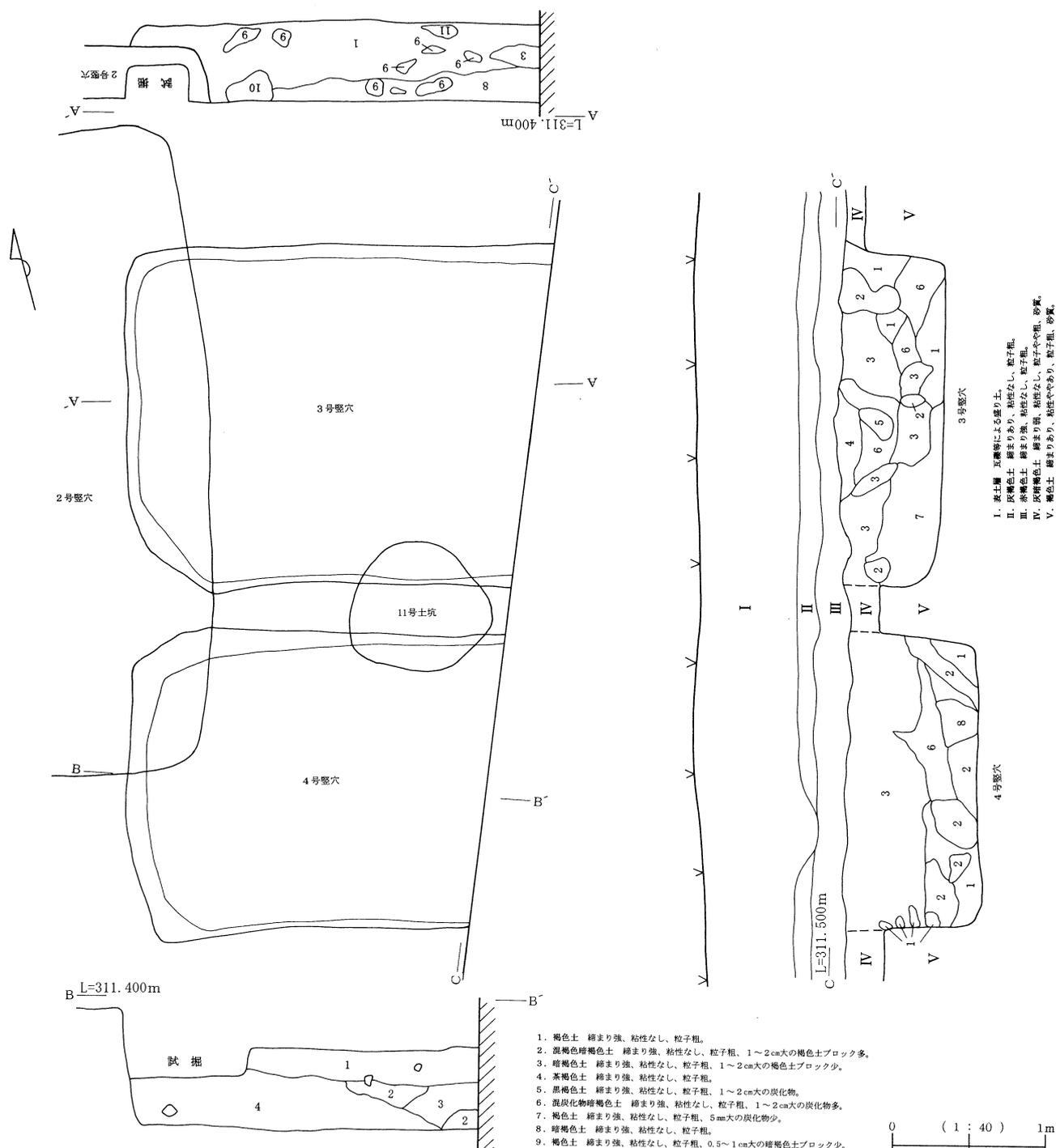
調査区の北部東側から南北に並列するように2基の竪穴状遺構(3・4号)が確認された。3・4号竪穴状遺構は2号竪穴状遺構および11号土坑と重複関係にあり、これらの遺構によって切られている。

3号竪穴状遺構 (第11・12図、図版1-3・4-8)

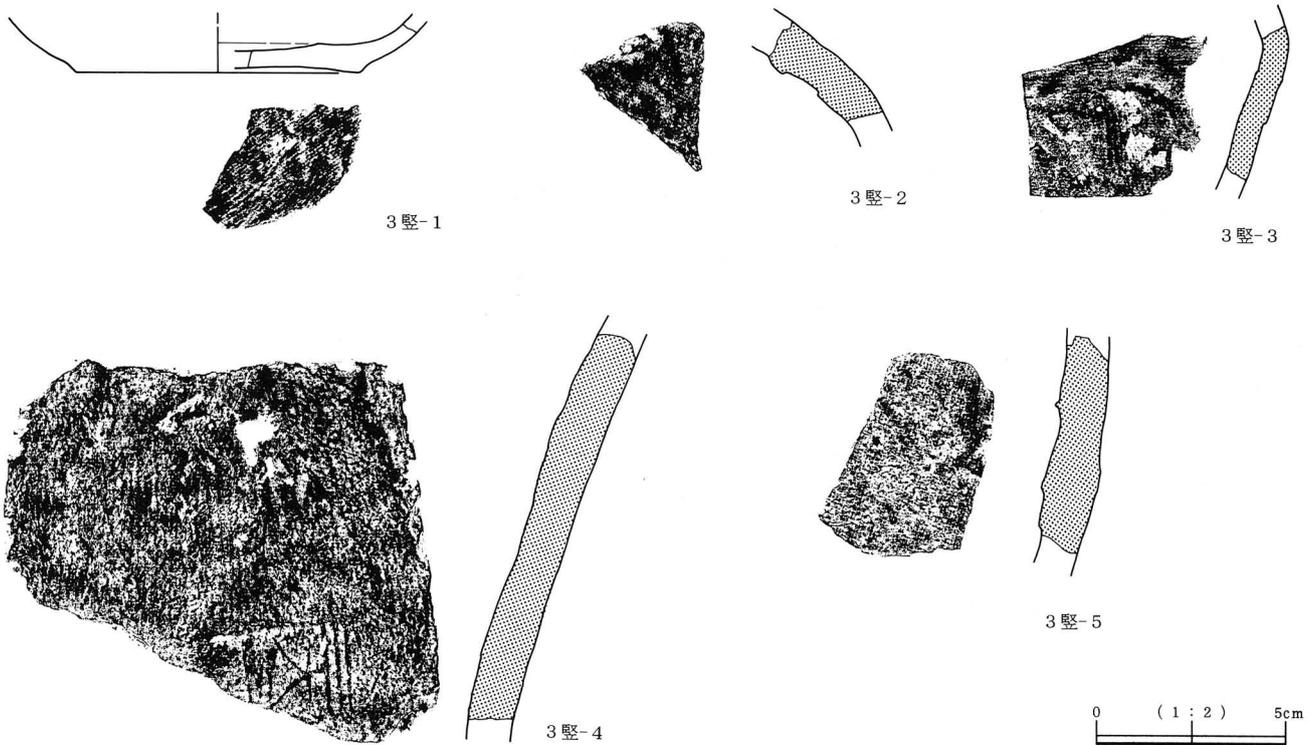
規模は確認可能な範囲で東西約2.9m、南北約2.4mを測り、調査区外のため東側についての詳細は明らかでないが、おそらく隅丸長方形を呈するとみられる。

本竪穴状遺構は南北セクションの北部の観察で基本土層にみる第Ⅲ層赤褐色土層下部、ちょうど第Ⅳ層暗褐色土層内から掘り込まれていることが明らかとなり、遺構の深さは約70cmに達する。

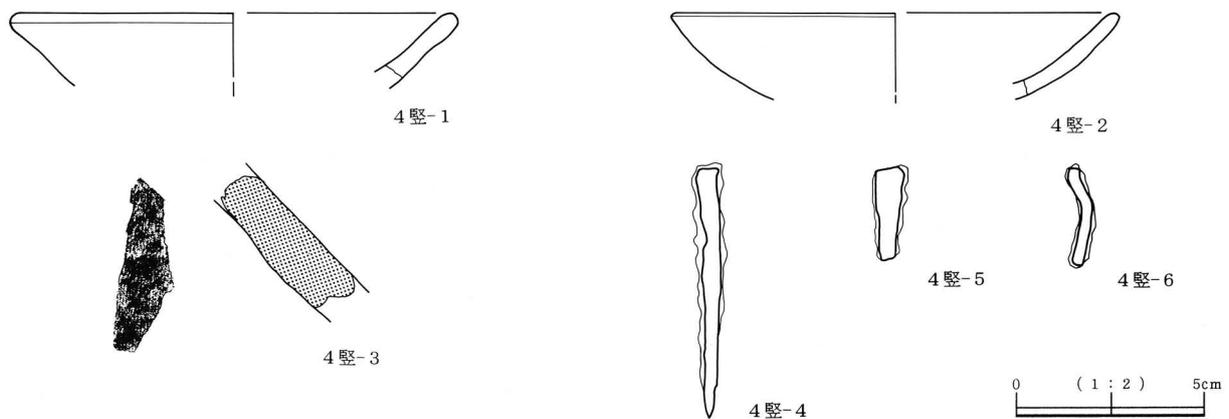
覆土は暗褐色土層を基調とし褐色土層、大・小の褐色土ブロックが混在し、5~7層には炭化物が含まれる。



第11図 3・4号竪穴状遺構



第12図 3号竪穴状遺構出土遺物



第13図 4号竪穴状遺構出土遺物

4号竪穴状遺構 (第11・13図、図版1-4, 4-8)

規模は確認可能な範囲で東西約2.6m、南北約2.1mを測り、東側は調査区外となり、長方形を呈すると考えられる。調査確認面からの深さは約65cmあり、3号竪穴状遺構と同様に基本土層の第IV層内から掘り込まれているとみられ、本来深さ約80cm前後はあったものと推測される。

覆土は、大きく上層で暗褐色土層が主体となっており、下層では褐色土層を基調としている。とくに下層は暗褐色、褐色の大型ブロックが多分に混在しており、また6層には1~2mm大の炭化粒が多く含まれている。

3・4号竪穴状遺構からは縄文土器片、平安時代の土師器片、中世の土師質皿(かわらけ)片、常滑陶器片の細片があり、そのほか鉄釘3点などが出土している(第12・13図)。

No.	挿図	器形	計測値(mm)			重さ(g)	図版
			最大長	最大幅	最大厚		
2堅-1	6	鉄釘	51.0	4.7	4.8	1.95	2-7
2堅-3	6	鉄釘	35.0	7.0	8.4	3.05	2-7
2堅-2	6	鉄釘	29.4	8.1	5.5	1.61	2-7
4堅-4	13	鉄釘	70.3	8.3	6.0	4.71	4-8
4堅-5	13	鉄釘?	29.1	5.6	5.5	1.30	4-8
4堅-6	13	鉄釘	28.2	9.6	5.1	1.98	4-8

第2表 竪穴状遺構出土の鉄製品一覧

No.	挿図	種別	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	特徴	備考	図版
				器高	口径	底径						
1 堅-1	4	土師質	かわらけ	—	—	—	緻密、赤色粒子、	鈍い橙色	良好	ロクロ成形。		4-8
1 堅-2	4	土師質	かわらけ	—	—	—	やや密、赤色粒子、金雲母、長石	淡橙色	良好	ロクロ成形。		4-8
1 堅-3	4	土師質	かわらけ	—	—	—	やや密、赤色粒子、石英	橙色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		4-8
1 堅-4	4	陶器	播鉢	—	(29.3)	—		赤茶褐色	良好	鉄軸。	15c 中頃	4-8
2 堅-1	6	土師質	かわらけ	—	(11.5)	—	緻密、赤色粒子、石英	淡橙色	良	ロクロ成形。		2-7
2 堅-2	6	土師質	かわらけ	—	—	—	やや密、赤色粒子、金雲母、長石	鈍い橙色	良	ロクロ成形。		2-7
2 堅-3	6	陶器	腰折皿?	—	(8.7)	—		褐灰色	良好	灰軸。	15c 後半	2-7
2 堅-4	6	陶器	祖母懷茶壺	—	—	—	緻密	赤茶褐色	良好	鉄軸。	14c 後半~15c 代	2-7
2 堅-5	6	瓦質	火鉢	—	(34.7)	—	細、赤・黒色粒子、金雲母	鈍い橙色	良好		在地産	2-7
2 堅-6	6	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			2-7
2 堅-7	6	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			2-7
2 堅-8	6	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良			2-7
2 堅-9	6	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良			2-7
2 堅-14	7~10	銅製品	仏具など	—	—	—	—	—	—	—	第1表参照	3-4
3 堅-1	12	土師質	かわらけ	—	—	(7.5)	やや密、赤色粒子、石英	明橙色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		4-8
3 堅-2	12	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			4-8
3 堅-3	12	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			4-8
3 堅-4	12	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			4-8
3 堅-5	12	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			4-8
4 堅-1	13	土師質	かわらけ	—	(11.5)	—	やや密、赤色粒子、金雲母、石英	鈍い橙色	良	ロクロ成形。		4-8
4 堅-2	13	土師質	かわらけ	—	(11.6)	—	やや密、赤色粒子、石英	淡橙色	良	ロクロ成形。		4-8
4 堅-3	13	陶器	常滑甕	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			4-8

第3表 竪穴状遺構出土遺物一覧

2. 土坑・溝状遺構 (第14~18図、第4~7表、図版5)

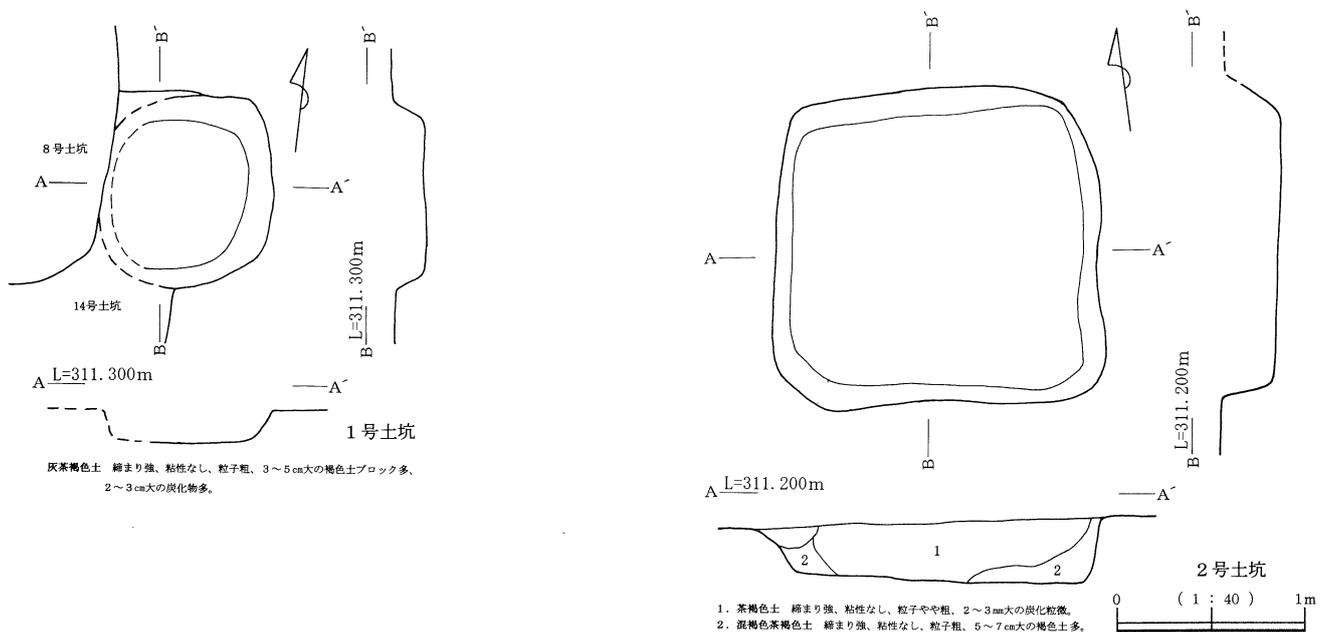
土坑は計14基が確認された。形態的には、方形1~5・9号土坑、長方形6・8・14号土坑、円形7・10・11・13号土坑がある。12号土坑は調査区の南端に位置し、攪乱もあり形態は明らかでない。

中には、拳大から人頭大までの石が詰め込まれたタイプの土坑が3基(12~14号土坑) 発見された。各土坑からの出土遺物は少なく、細片のものが大半であった。

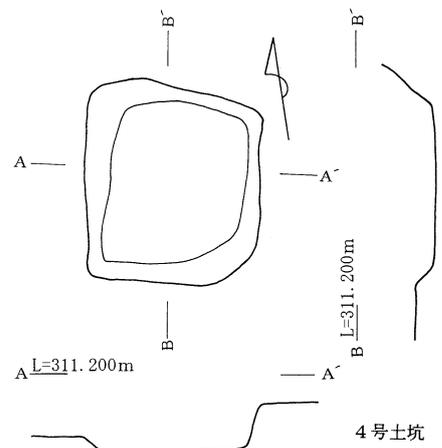
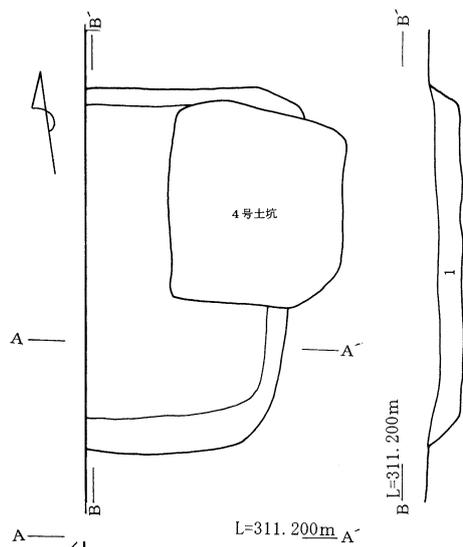
溝状遺構は1基あり、調査区中央からやや南東部に位置し、途中断絶している。遺物等はなかった。

No.	挿図	器形	計測値 (mm)			重さ (g)	図版
			最大長	最大幅	最大厚		
11土-1	18	鉄釘	21.3	7.5	6.2	2.02	4-8

第4表 土坑内出土の鉄製品一覧



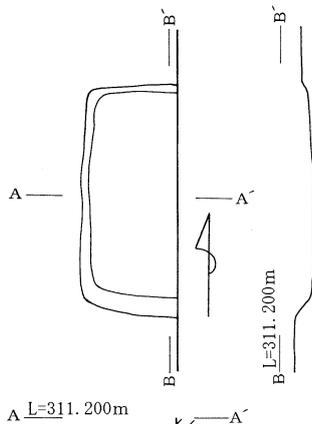
第14図 土坑 (1)



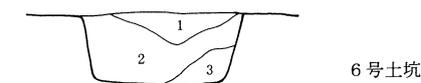
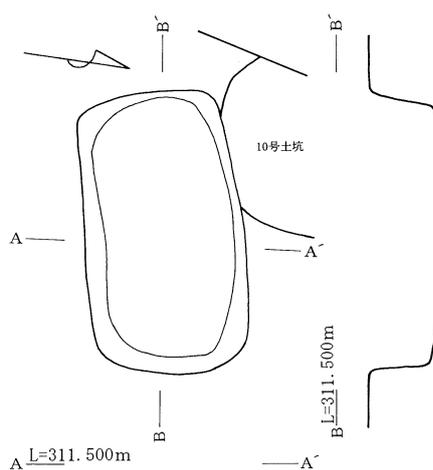
暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。



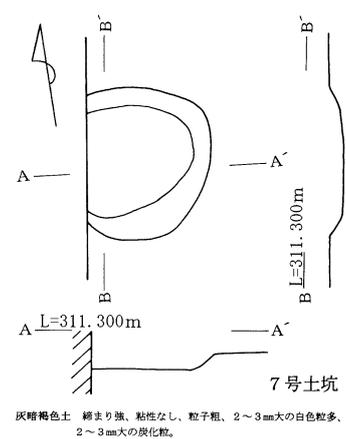
暗灰褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の灰褐色土ブロック多。



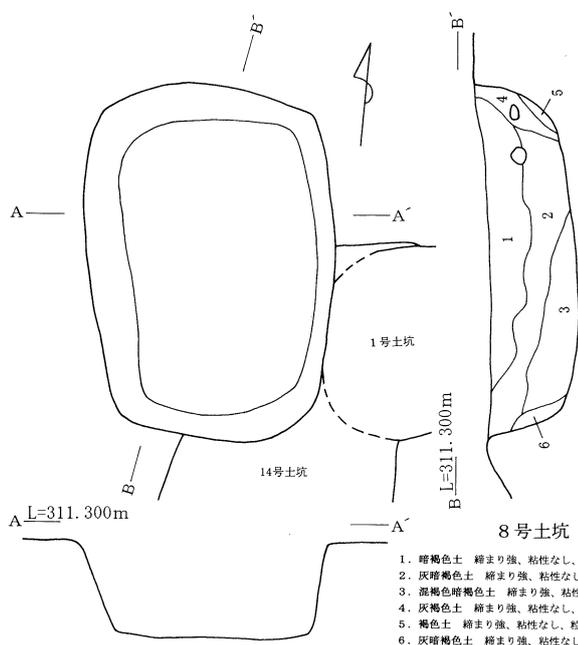
暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。



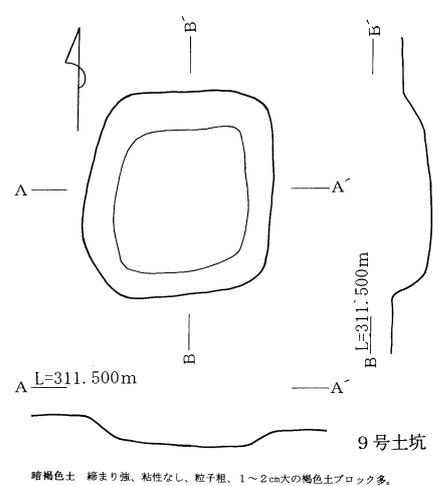
1. 暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の白色粒多。
2. 暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の白褐色土ブロック少。
3. 褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、3~5cm大の褐色土ブロック多。



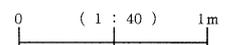
灰暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、2~3mm大の白色粒多、2~3mm大の炭化粒。



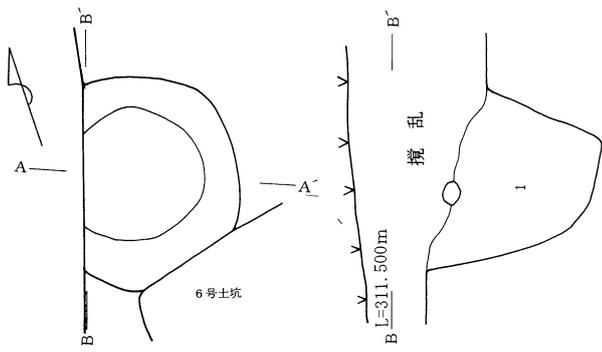
1. 暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、0.5cm大の炭化粒少。
2. 灰暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、0.5~1cm大の褐色土ブロック少。
3. 混褐色暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、2~3cm大の褐色土ブロック多。
4. 灰褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。
5. 褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。
6. 灰暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、2~3cm大の褐色土ブロック少。



暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の褐色土ブロック多。

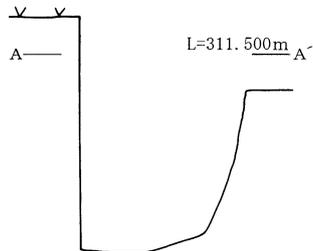


第15図 土坑(2)



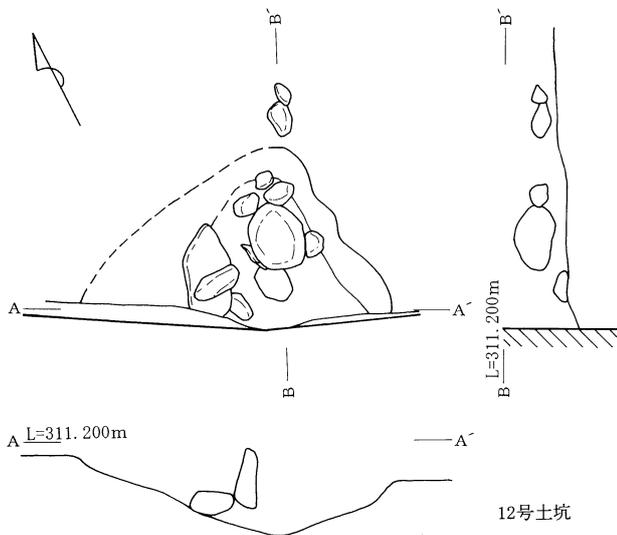
6号土坑

攪乱



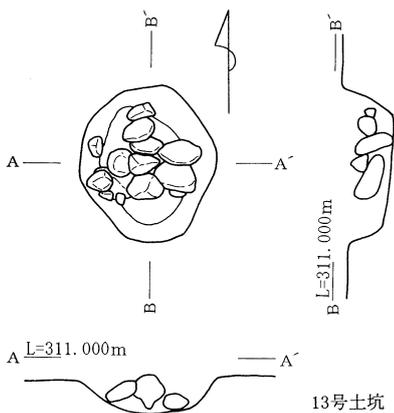
10号土坑

暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の褐色土ブロック少、炭化粒0.5cm大少。



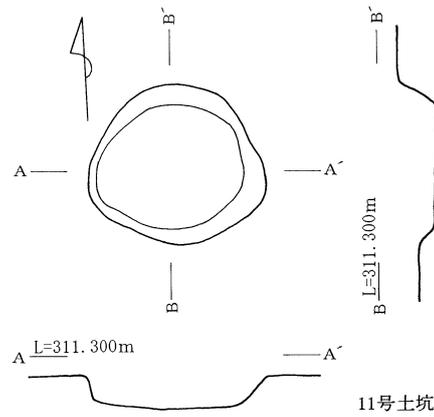
12号土坑

暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。



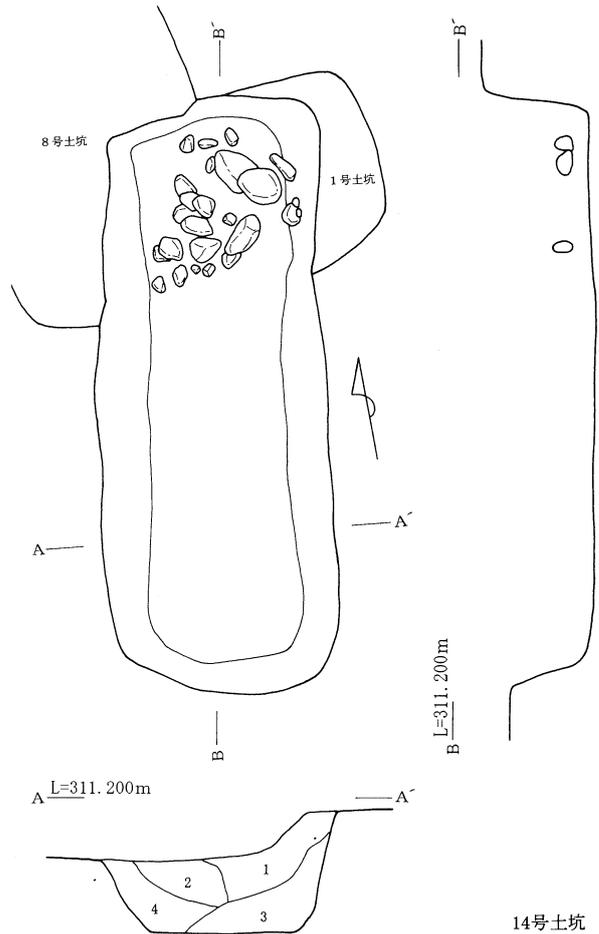
13号土坑

混褐色暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の褐色土ブロック多。



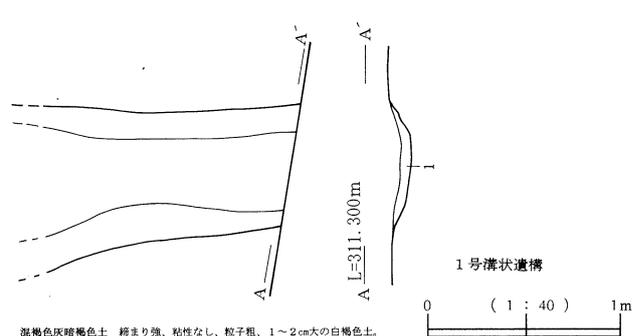
11号土坑

暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、2~3cm大の炭化物少。



8号土坑

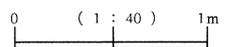
1. 褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、3~4cm大の暗褐色土ブロック少。
2. 褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗。
3. 明褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、3~4cm大の暗褐色土ブロックと1~2cm大の暗褐色土ブロック混在。
4. 明褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、3~4cm大の暗褐色土ブロック。



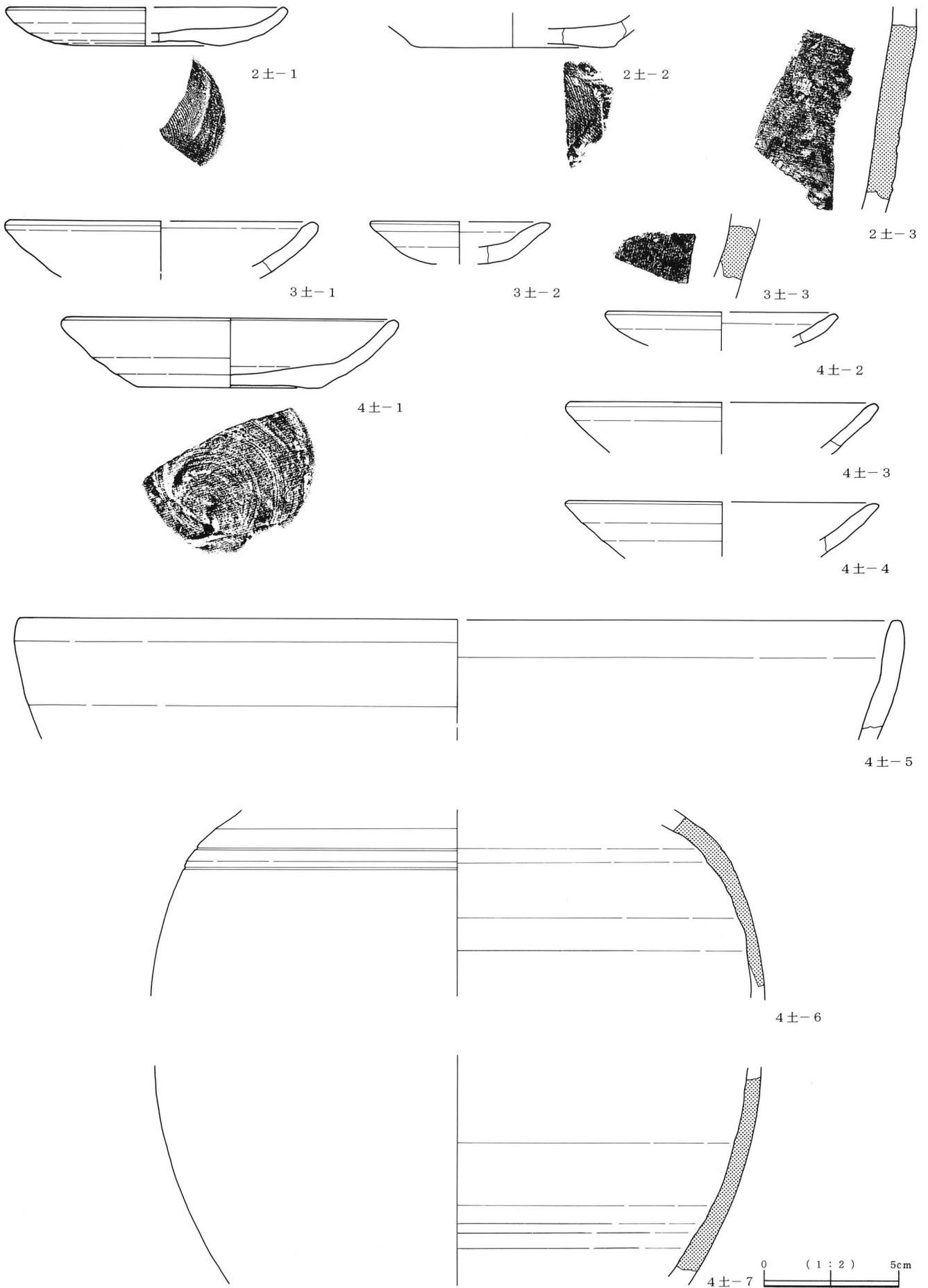
14号土坑

混褐色灰暗褐色土 締まり強、粘性なし、粒子粗、1~2cm大の白褐色土。

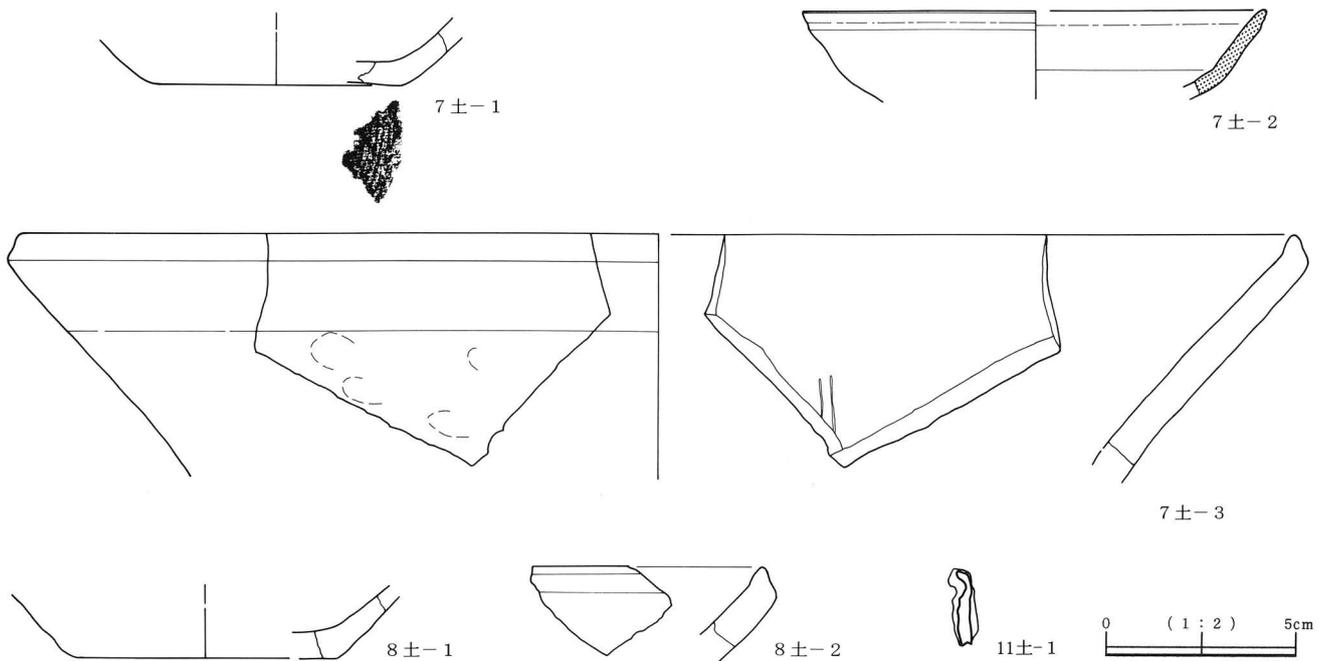
1号溝状遺構



第 16 図 土坑と構状遺構 (3)



第 17 図 土坑出土遺構 (1)



第18図 土坑出土遺物(2)

No.	調査区内位置	形態	規模 (m)			主な出土遺物	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	中央東寄り	方形	1.02	(0.70)	0.18		
2号	南部中央	方形	1.74	1.68	0.36	縄文1、平安2、中世7	5-1
3号	南側西	方形	2.00	(1.10)	0.16	縄文6、平安4、中世5	5-2
4号	南側西	方形	1.10	(0.94)	0.22	縄文5、平安3、中世8	5-2
5号	南側東	方形	1.26	(0.52)	0.10	縄文2、平安1、中世3	
6号	北部西	隅丸方形	1.53	0.85	0.40	縄文2、平安1、中世7	5-3
7号	中央西	円形	0.82	(0.66)	0.20	平安5、中世4	5-4
8号	中央	隅丸方形	1.92	1.34	0.52	縄文2、平安2、中世4、不明1、鉄1、石1	
9号	北部中央東	方形	1.08	0.98	0.17	縄文1、平安1	
10号	北部西	円形	1.15	(0.82)	0.92	縄文4、平安3、中世2、須恵器1	
11号	北側東	楕円形	0.56	0.86	0.20	平安1、中世2	5-5
12号	南部中央西	不整形	1.66	(0.98)	0.42	中世1	
13号	北側中央東	楕円形	0.83	0.72	0.20		5-6
14号	中央南寄り	長方形	3.24	1.26	0.66	縄文4、平安4、中世1、須恵器1	5-7

第5表 土坑一覧

No.	調査区内位置	規模 (m)			備考	図版
		最大長	幅	深さ		
1号	中央東	1.34	0.64~0.90	0.12		

第6表 構状遺構一覧

No.	挿図	種別	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	特徴	備考	図版
				器高	口径	底径						
2土-1	17	土師質	かわらけ	1.5	(10.4)	(5.6)	やや密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		5-8
2土-2	17	土師質	かわらけ	—	—	(7.3)	密、赤色粒子、金雲母、石英	橙褐色	良	ロクロ成形。底部回転糸切り。		5-8
2土-3	17	陶器	常滑壺	—	—	—	粗	赤茶褐色	良好			5-8
3土-1	17	土師質	かわらけ	—	(11.5)	—	緻密、赤色粒子、金雲母	橙褐色	良好	ロクロ成形。		5-8
3土-2	17	土師質	かわらけ	—	(6.8)	—	やや密、金雲母、石英	赤橙褐色	良	ロクロ成形。		5-8
3土-3	17	陶器	常滑壺	—	—	—	粗	淡暗茶色	良好			5-8
4土-1	17	土師質	かわらけ	2.6	(12.2)	(7.0)	やや密、赤色粒子、石英	赤橙褐色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		5-8
4土-2	17	土師質	かわらけ	—	(8.7)	—	密、赤色粒子、金雲母、石英	橙褐色	良好	ロクロ成形。		5-8
4土-3	17	土師質	かわらけ	—	(11.7)	—	やや密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良好	ロクロ成形。		5-8
4土-4	17	土師質	かわらけ	—	(11.7)	—	やや密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良好	ロクロ成形。		5-8
4土-5	17	土器	内耳	—	(33.6)	—	やや粗、赤・白色粒子	暗茶色	良好			5-8
4土-6	17	陶器	祖母懷茶壺	—	—	—	緻密	赤茶褐色	良	鉄釉。	14c後半~15c代	5-8
4土-7	17	陶器	祖母懷茶壺	—	—	—	緻密	赤茶褐色	良	鉄釉。	14c後半~15c代	5-8
7土-1	18	土師質	かわらけ	—	—	(6.7)	密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		5-8
7土-2	18	陶器	縁釉小皿	—	(12.2)	—	密	乳白色	良好	灰釉。	15c中頃	5-8
7土-3	18	土師質	播鉢	—	(33.9)	—	緻密、赤色粒子、石英	橙褐色	良好	ロクロ成形。	在地産	5-8
8土-1	18	土師質	かわらけ	—	—	(7.0)	やや密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良	ロクロ成形。底部回転糸切り。		5-8
8土-2	18	土師質	播鉢	—	—	—	緻密、赤色粒子、長石	橙褐色	良好	ロクロ成形。	在地産	5-8

第7表 土坑出土遺物一覧

第3章 遺構外遺物

本調査区から出土した遺物は細片が多く量的にも少なく、縄文土器、平安時代の土師器、須恵器、また平安末頃の陶磁器類や中世の土器などが出土している（第19・20図、第8表）。

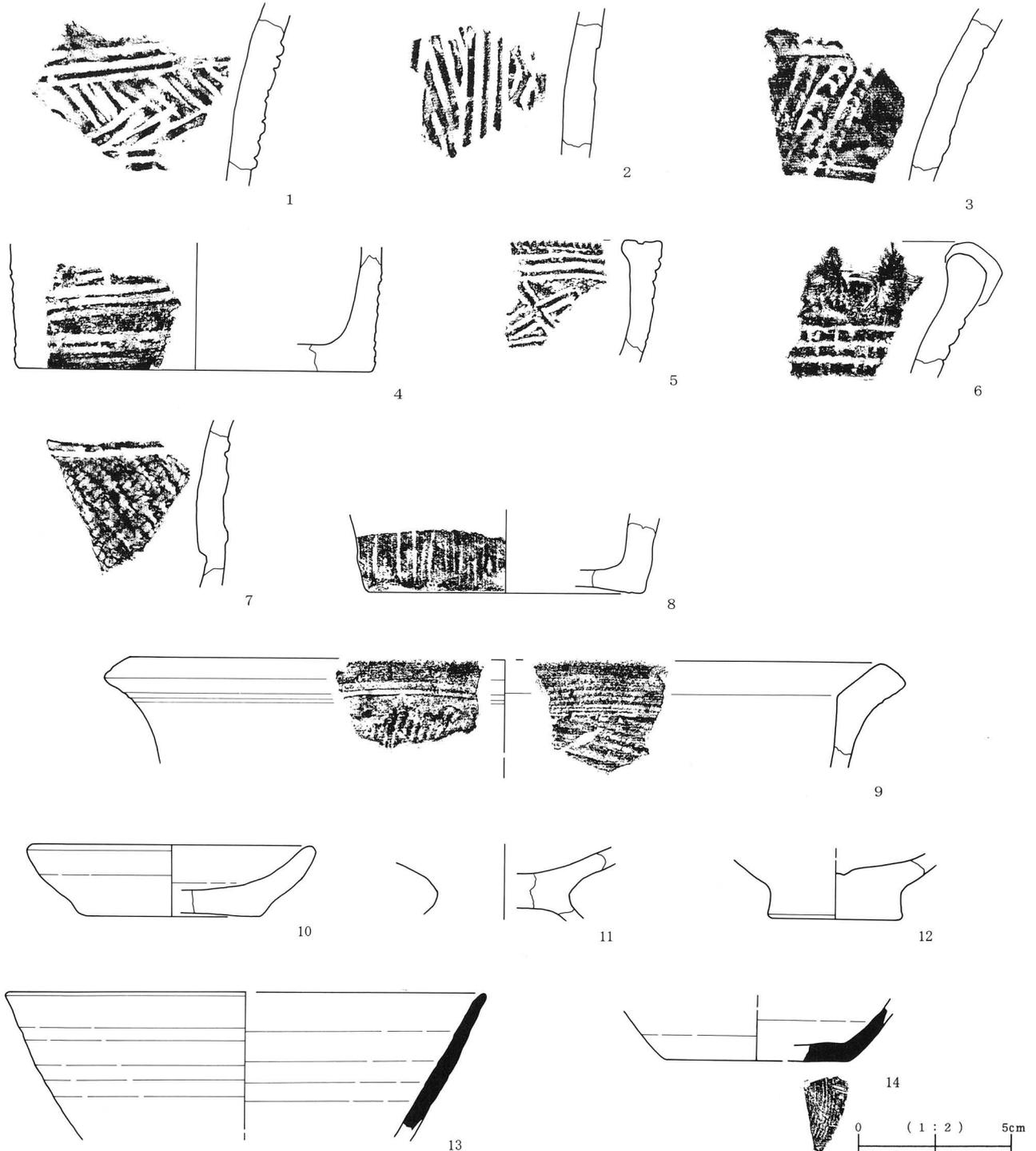
1～8は縄文土器で、1～6は前期後半～末葉、7・8は中期前半に相当する。

9～12は平安の土師器で9は甕の口縁、10は土師質小皿、11は脚高高台杯、12は柱状高台を有する。

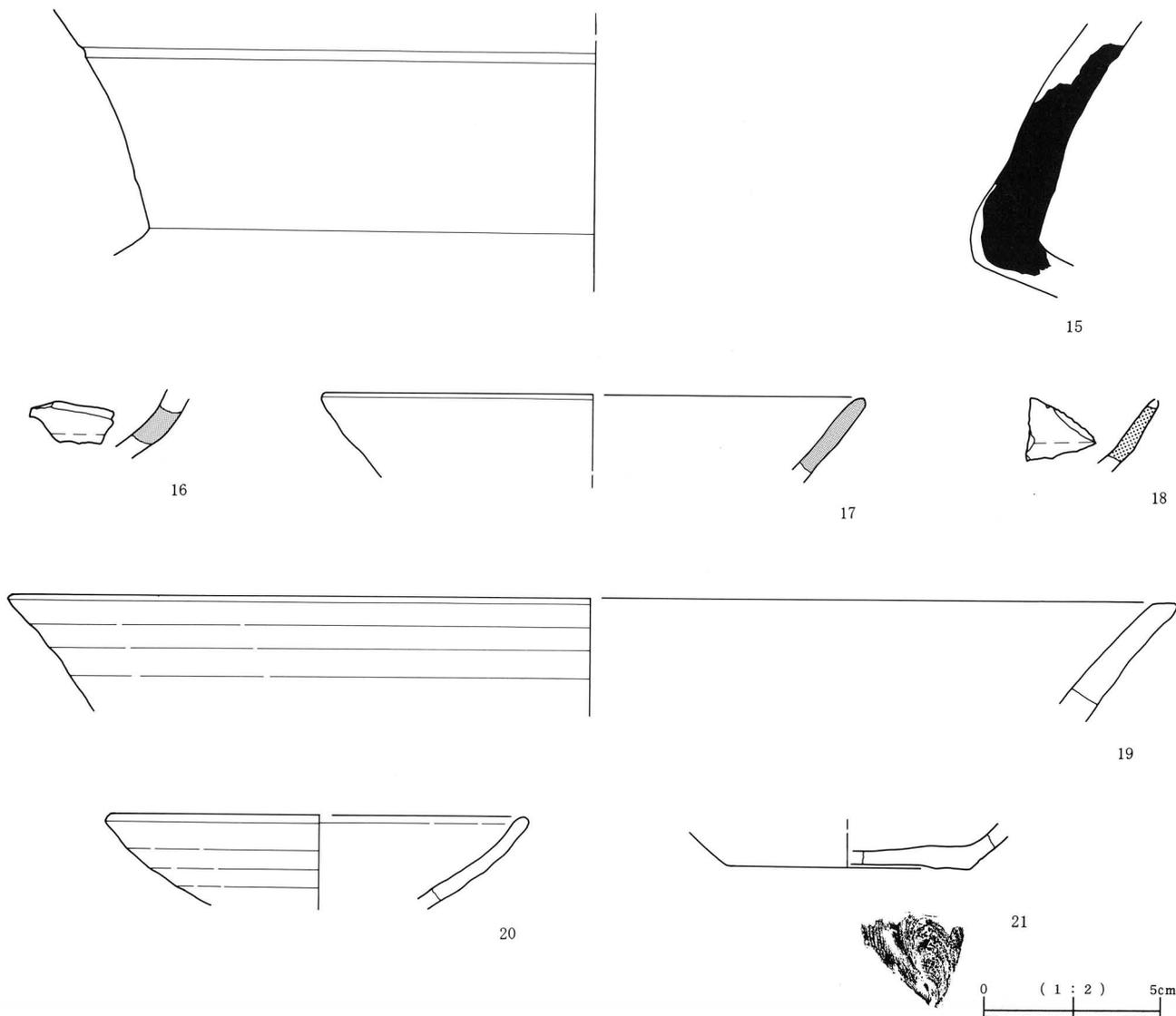
13～15は須恵器で13・14は坏類、15は大型の甕の口縁部である。

16・17は貿易陶磁器で、16は白磁、17は青磁である。18は瀬戸美濃陶器の平碗とみられる。

19～21は中世の土器で19は播鉢口縁部、20・21はかわらけ片である。



第19図 遺構外出土遺物(1)



第20図 遺構外出土遺物(2)

No.	出土地点	種別	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	特徴	備考	図版
				器高	口径	底径						
第19図1	6土	土器	縄文	—	—	—	粗、赤色粒子、黒色雲母、石英	赤茶褐色	良	半載竹管の斜・横位の沈線。		
2	10土	土器	縄文	—	—	—	粗、赤色粒子、黒色雲母、石英	赤褐色	良	半載竹管の斜・縦位の沈線。		
3	14土	土器	縄文	—	—	—	粗、黒雲母、石英	赤茶褐色	良	半載竹管の横・斜位の爪形文。		
4	2堅	土器	縄文	—	—	(11.8)	粗、金雲母、石英	赤褐色	良好	半載竹管による横位の沈線。		
5	10土	土器	縄文	—	—	—	やや粗、赤色粒子、黒色雲母、石英	淡茶色	良好	半載竹管による斜・縦位の沈線。口唇部連続押し引き。		
6	2堅	土器	縄文	—	—	—	粗、赤色粒子、黒色雲母、石英	暗橙褐色	良好	半載竹管による横位の沈線と刻み。口縁部2箇所突起。		
7	14土	土器	縄文	—	—	—	粗、金雲母、石英、長石	赤茶褐色	良好	縄文R.L. 横位の沈線。		
8	3土	土器	縄文	—	—	(9.3)	粗、黒雲母、石英	赤茶褐色	良好	縦位沈線。		
9	一括	土師器	甕	—	(25.0)	—	粗、金・黒雲母、石英	赤褐色	良好	ハケ調整。		
10	13	土師質	土師質小皿	2.4	(9.3)	(5.8)	やや密、赤色粒子、金雲母	鈍い橙色	良	ロクロ成形。底部回転糸切り。		
11	1堅	土師質	脚高高台坏	—	—	—	やや粗、黒雲母、石英	暗赤褐色	良	ロクロ成形。	11c代	
12	1堅	土師質	柱状高台坏	—	—	(4.4)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	ロクロ成形。底部回転糸切り。	12~13c前半	
13	4堅	須恵器	坏	—	(15.8)	—	やや粗	灰褐色	良好	ロクロ成形。		
14	1堅	須恵器	坏	—	—	(6.0)	密	灰褐色	良好	ロクロ成形。		
第20図15	3堅	須恵器	大甕	—	—	—	密	灰褐色	良好	ロクロ成形。		
16	4土	磁器	白磁壺or瓶	—	—	—	密	白色	良好		12~13c	
17	一括	磁器	青磁碗	—	—	—	密	淡緑色	良好		龍泉窯。	
18	3堅	陶器	平碗?	—	(15.8)	—	密	深緑色	良好	灰軸。	15c中頃。	
19	一括	土師質	播鉢?	—	(34.0)	—	密、赤色粒子、金雲母	橙褐色	良好	ロクロ成形。	在地産。	
20	一括	土師質	かわらけ	—	(12.1)	—	密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。		
21	一括	土師質	かわらけ	—	—	(7.1)	密、赤色粒子、石英	淡橙褐色	良	ロクロ成形。		

第8表 遺構外出土遺物一覧

ま と め

調査の結果、縄文時代、平安時代、中世の遺構と遺物が確認された。縄文、平安時代はわずかに土器が出土し、中世では竪穴状遺構4基、土坑14基、溝状遺構1基などからなる遺構が発見された。

遺物：遺構内外から出土した中世の遺物には、かわらけ、播鉢、内耳などの土器類や瓦質土器のほか、常滑甕、播鉢、碗、皿類などの陶器類がある。中でも、かわらけ類はロクロ成形のものに限られ、器壁の厚みが底部から口縁にかけほぼ均一で、口唇部付近で尖り気味となるかわらけに厚くなる特徴を有する。さらに、このようなかわらけに伴い遺構の内外で出土している瀬戸美濃産陶器類は量的には数少ないが、いずれも古瀬戸後期ないし後IV期に限られることから、本調査で出土した中世遺物は15世紀中頃～後半に相当するものと考えられる。

遺構：竪穴状遺構は調査区北側に偏在する。中でも3・4号竪穴状遺構は深さに違いがあるが、東西の主軸が同様に東壁を揃えて並列するなど、意図的な配置がみられるため、ほとんど時期差はないと思われる。そのため4基の竪穴状遺構はそれぞれの切り合い関係から3・4号→2号→1号の順に構築されたことが窺える。

土坑は計14基確認され、方形・長方形・円形の3タイプがある(12号土坑は不明)。中でも、方形・長方形タイプの土坑には、主軸が北からやや東側へと振れるもの(2～5・9・14号)やほぼ北に向くもの(1・6・8号土坑)があり、前者は竪穴状遺構群とほぼ同様な主軸を示すなど、互いに相関関係があるように思われる。

また、竪穴状遺構にみられる3・4号→2号→1号の切り合い順序からさらに3つの小期が存在すると思われる。そのため各土坑も3小期に振り分けられると思われるが今のところ詳細は不明である。

今回、遺構内からは時期を検討するに良好な資料には恵まれておらず、わずかに出土したかわらけ類の特徴や陶器類の時期、また遺構の切り合い関係から判断して発見された中世遺構は15世紀後半代に属するとみられる。

なお、14基の土坑は他の遺跡の類似遺構と比較して規模や形態などから中世墓の可能性も考えられる。

2号竪穴状遺構の銅製品類(2 竪 14 a～p) 本遺構から仏具を含む銅製品類17点が一箇所に固まり出土した。

中でも比較的良好に遺存していた錫杖頭14bは相輪が長く、蕨手、五輪塔などが面取りされて線彫りを施した造りから、室町時代(15世紀代)のものとして推測され(註1)、唯一銅製品類の中で時期の指標となるものである。

銅製品類は錫杖頭14bや舍利塔の蓮華座下部14cなどをはじめとする破損品のほか、銅の塊や熱で溶融した塊(14n～p)の鋳物関連遺物とみられるものまで含まれていた。中でも水瓶に注目すると、胴部下半14eの底径と底板14gの大きさがほぼ同じで、胴部下半14eと胴部片14fに施された横位に巡る子持ち帯紐が同じ様相を呈するが、他に同じ部位の銅製品がないことから同一個体の可能性が考えられる。そして、各破片は単に通常の使用で各々のものに破損したとは考えにくい状態であり、むしろ意識的に力を加え捻じ曲げて切断したり、熱を加えた行為が見受けられる。他の14i～lなども遺存状態からみて同様なことが言えるかもしれない。

また、蓮華座下部14cの表面、水瓶注口14dの内側、水瓶胴下半14eの外表面、水瓶底板14gの片面、不明銅製品14iの口縁付近などに繊維質の有機物が付着していた(第8図-14e・g)。

この付着物は第5図右①にあるように銅製品類の固まりの外側にあたる面に限られて付着しており、おそらく繊維質のものを袋状にして銅製品類を中へ入れたか、あるいは繊維質のもので包んでいたためと考えられる。

このことから、銅製品類の遺存状態などを勘案すると、再び鑄造するために繊維質のもので包んでストックしておいたか、あるいは何らかの儀礼行為を行い終えたあとに銅製品類を繊維質のものでまとめて梱包し、本竪穴の東壁隅に埋納した可能性が考えられる。これについて今回の調査で根拠となる判断材料が乏しく不明と言わざるをえないが、発見されたタイプの竪穴状遺構の性格を解釈していく上で今後大きな課題となろう。

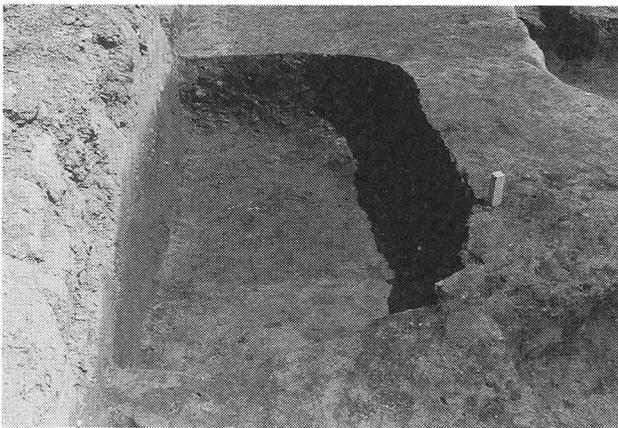
最後に、本遺跡は南北朝時代(14世紀)に甲斐金峰山を中心とする山岳信仰の登山道として発達した「御嶽道」に隣接しており、当時は密教との関わりが深い地域でもあった。今回、このような歴史背景との具体的な検討はできなかったが、今後さらに調査を重ねていく中で遺跡の性格を明らかにしていきたい。

(註1) 東京国立博物館 原田氏の御教示による。鎌倉時代のは鋳型の段階でこれらの装飾を造り出すようである。

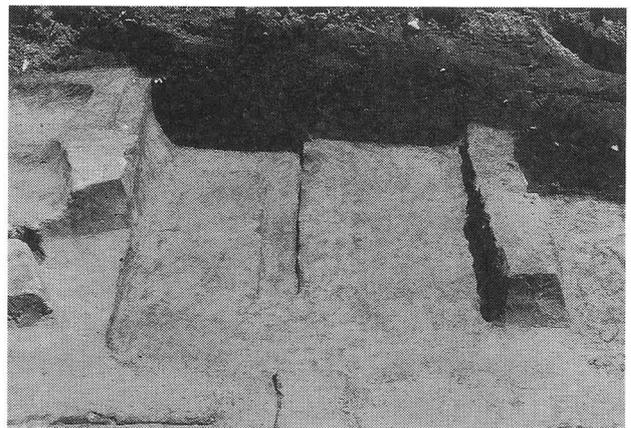
参考文献 佐野 隆 2000 「深山田遺跡」山梨県明野村教育委員会・峡北土地改良事務所
降矢哲男ほか 2001 「山梨県における中世の土器様相について」中世土器研究会編『中世土器研究論集』中世土器研究会
東京国立博物館 1983 特別展『日本の金工』
砺波市史編纂委員会 1990 『砺波市史—資料編1 考古、古代・中世』



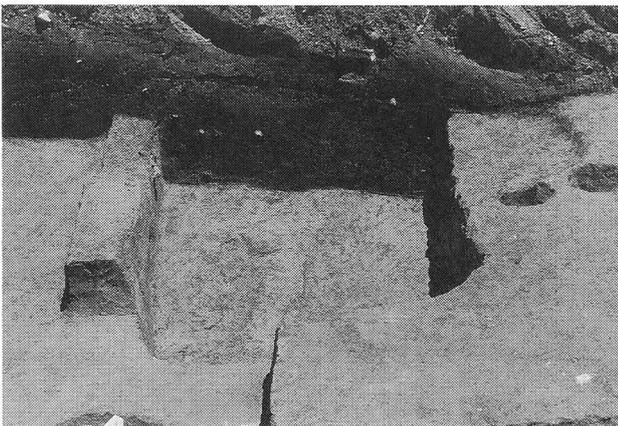
1. 遺跡全景



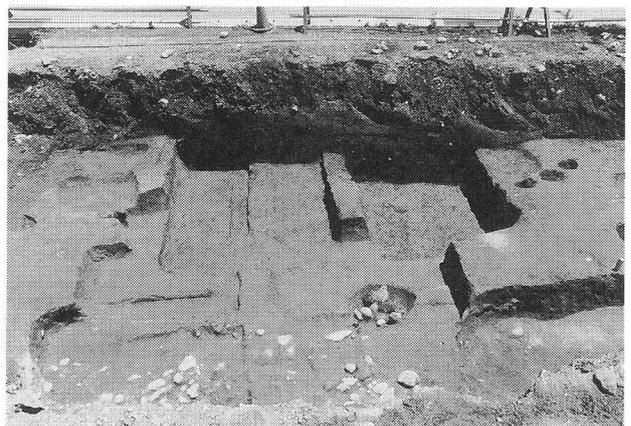
2. 1号竖穴状遺構（南から）



3. 3号竖穴状遺構（西から）



4. 4号竖穴状遺構（西から）



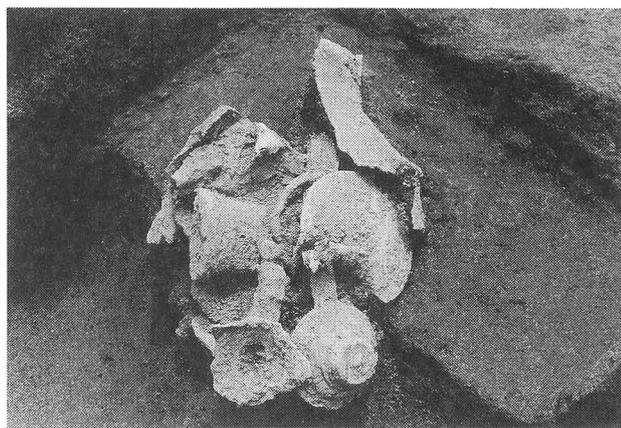
5. 1～4号竖穴状遺構全景（西から）



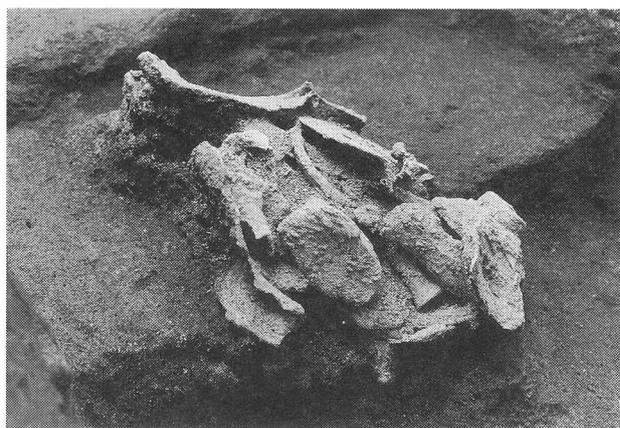
1. 2号竖穴状遺構（北から）



2. 2号竖穴状遺構調査時（○は銅製品出土地点）



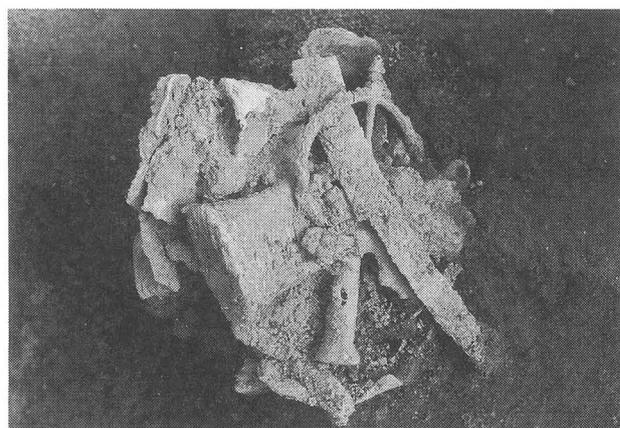
3. 銅製品出土状態（1）



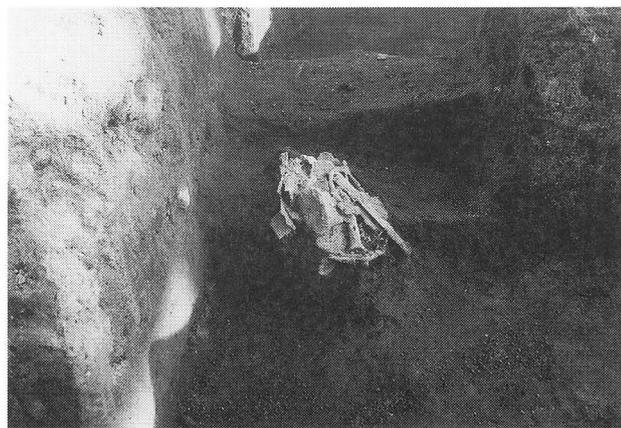
4. 銅製品出土状態（2）



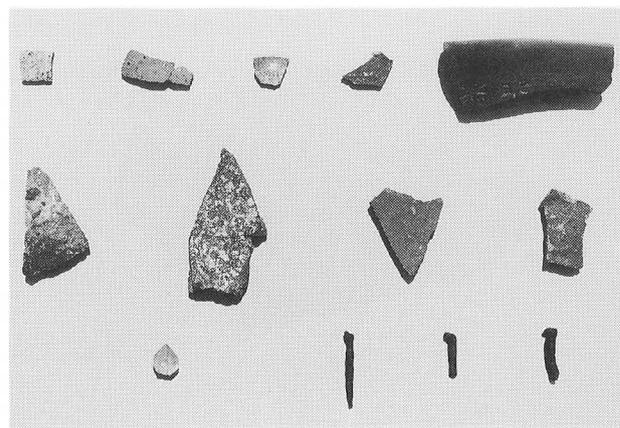
5. 銅製品出土状態（3）



6. 銅製品出土状態（4）



5. 銅製品出土状態（3）



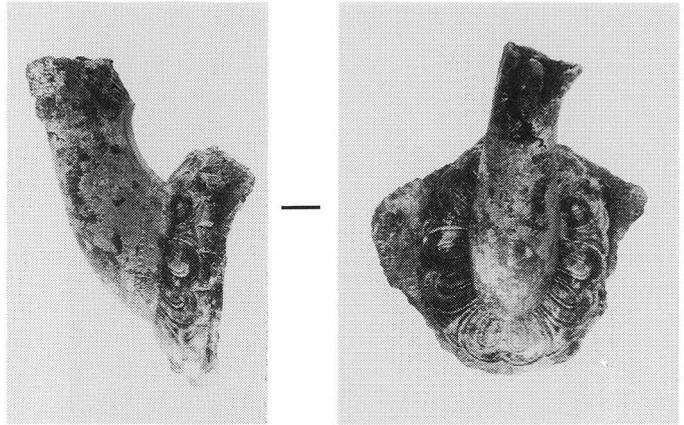
7. 2号竖穴状遺構出土遺物



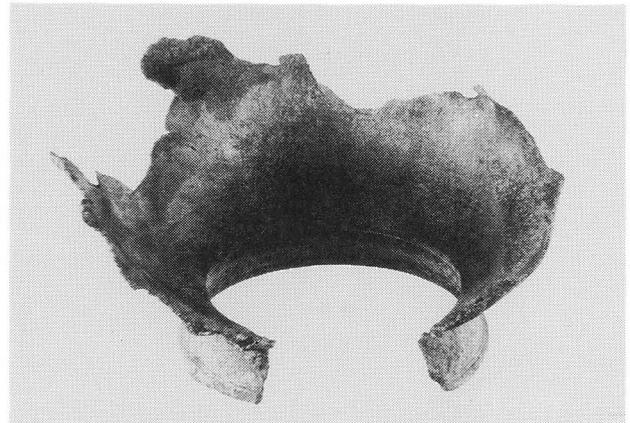
1. 錫杖頭 (2 堅 14 b)



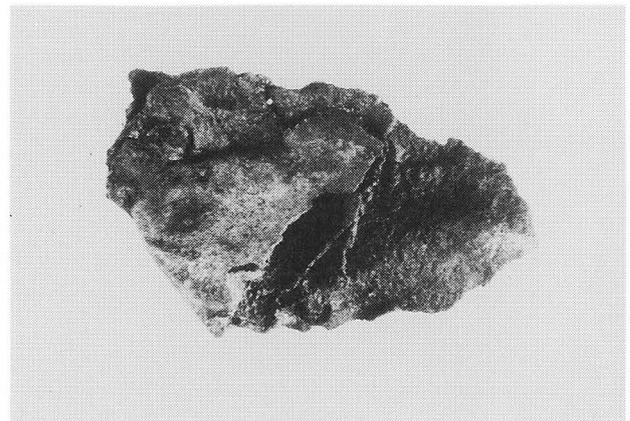
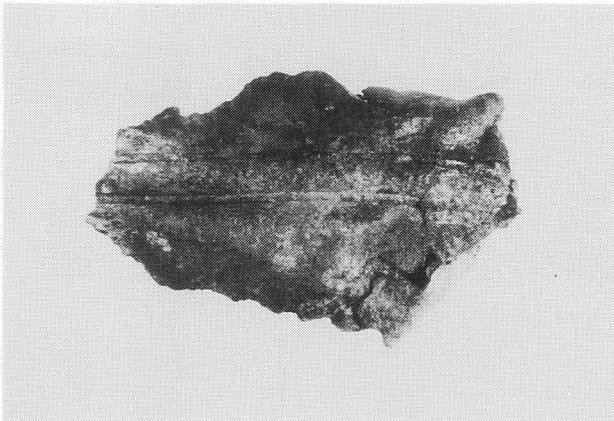
2. 舍利塔 (2 堅 14 c)



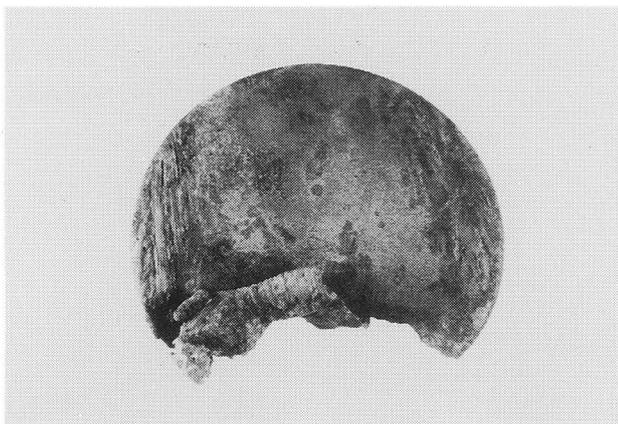
3. 水瓶注口 (2 堅 14 d)



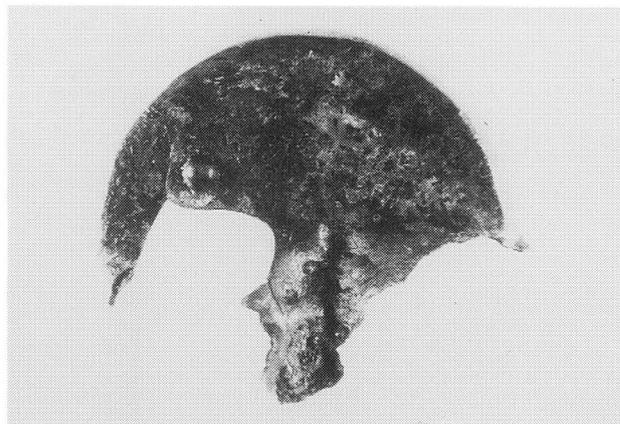
4. 水瓶胴下半 (2 堅 14 e)



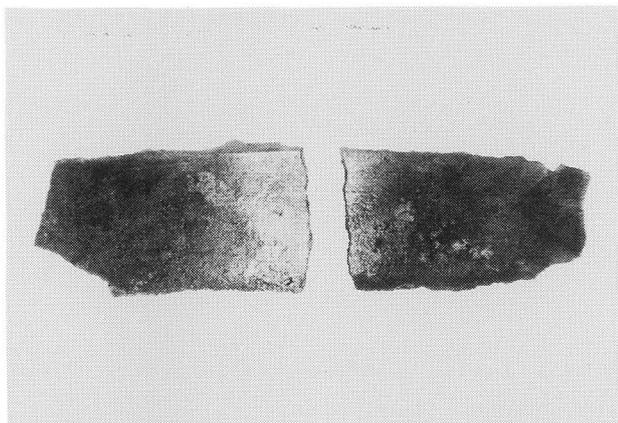
5. 水瓶胴部片 (2 堅 14 f)



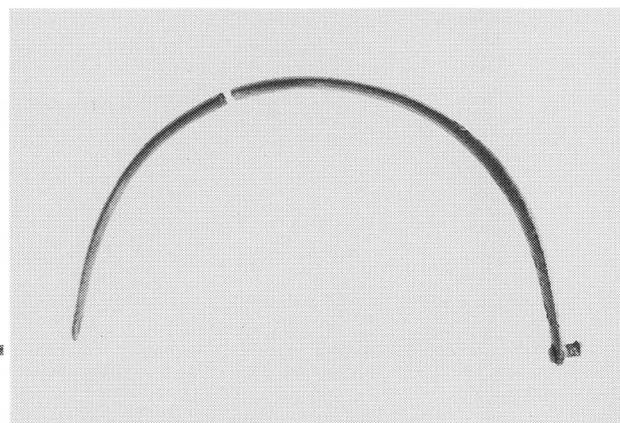
1. 水瓶底板 (2 堅 14 g)



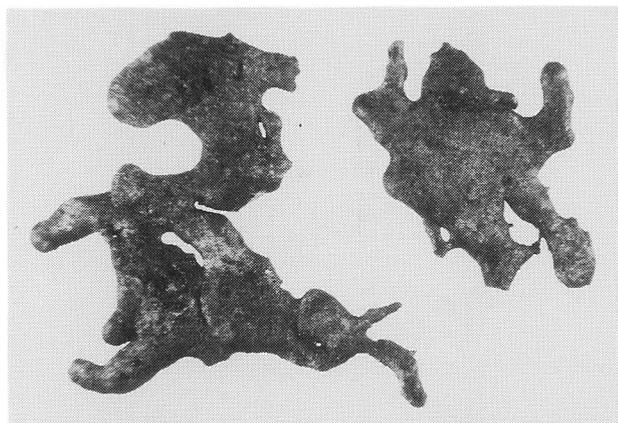
2. 不明容器 (2 堅 14 j)



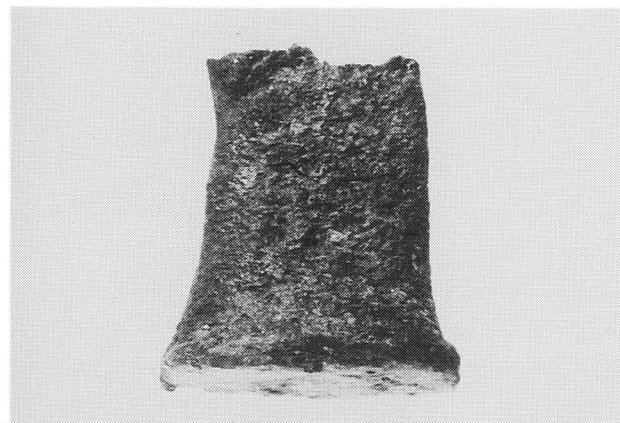
3. 不明容器 (2 堅 14 k)



4. 把手 (2 堅 14 m)



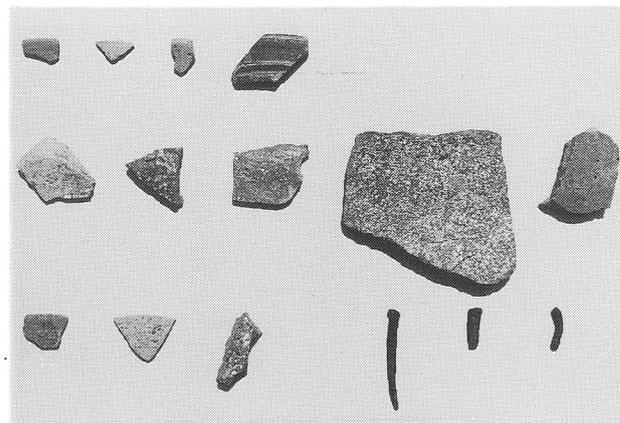
5. 溶融物 (14 m・o)



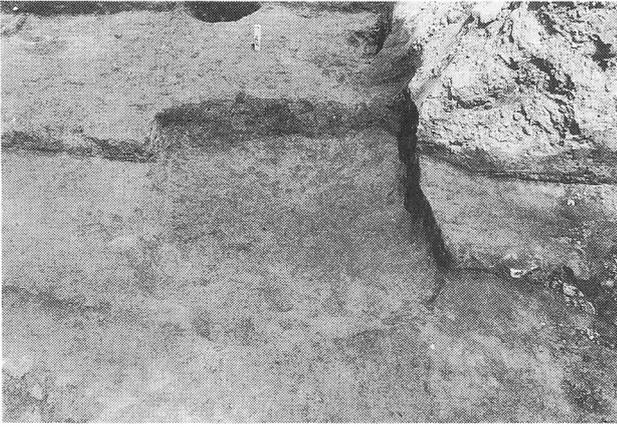
6. 銅塊 (14 p)



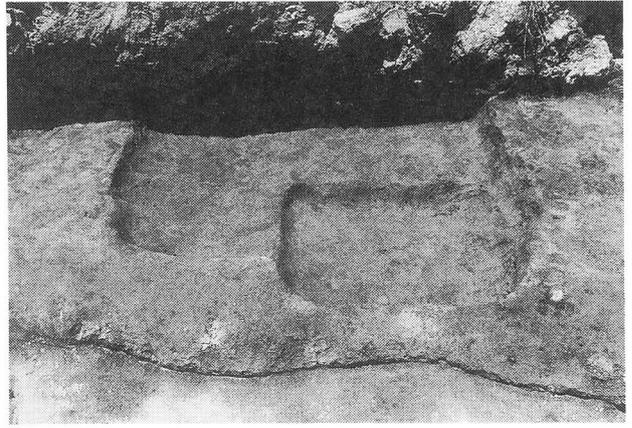
7. 水瓶胴下半側面 纖維付着状態



8. 竪穴状遺構出土遺物(上段-1号、中段-3号、下段-4号)



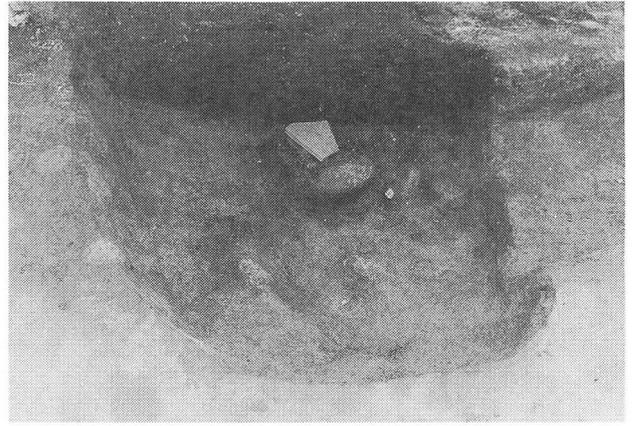
1. 2号土坑



2. 3·4号土坑



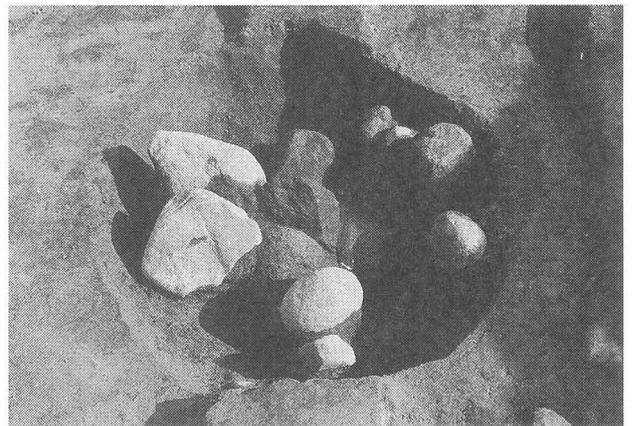
3. 6号土坑



4. 7号土坑



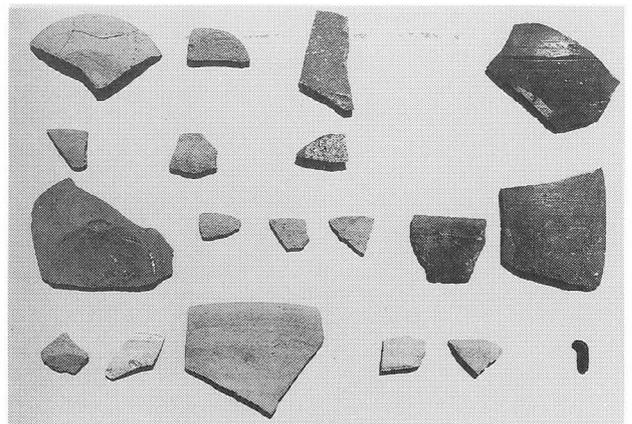
5. 11号土坑



6. 13号土坑



7. 14号土坑



8. 土坑内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さんぐうちいせき							
書名	山宮地遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	13							
編著者名	小坂 隆司							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成15年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
さんぐうちいせき 山宮地遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町島上条 1259-3外	193928	37			平成13年 7月5日～ 平成13年 7月30日	86	駐輪場・ 部室 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山宮地遺跡	集落跡	縄文時代 中世	竪穴状遺 構土坑 溝状遺構	縄文土器 土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器	錫杖頭や水瓶などの仏具を含んだ17点の銅製 品類が竪穴状遺構の中から一箇所にとまって 発見された。			

敷島町文化財調査報告 第13集

山宮地遺跡Ⅱ

発行日 2003年(H15)3月31日
 発行 敷島町教育委員会
 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
 TEL(055)277-4111
 印刷 (有)協和印刷社

